

城西

琵琶俱樂部

編

薩摩

青春

琵琶

歌

全
部

第
貳
輯

223
797

東京
打發堂陽

序

若し軍國の音楽なるものありとせば、薩摩武士の愛吟する薩摩琵琶は、正しく其重なるものなるべきか。三筋の糸の柔弱なる氣風を招くなるに、四筋の糸の尚武の精神を鼓舞すること如何に多かる。其はじめ、仁明天皇の御宇承和五年、唐より妙曲を携へ歸り、これを雲上に奉り、其より幾星霜の後、遂に此曲の陣中帷幕の音楽として、五位土掃部頭藤原貞敏、士氣を惹起するの具となすに至れり。降つて建久七年、島津忠久薩摩國へ下向の時、之を携へて家傳とし。永正大永の頃、島津貴久

内交

の父なる相摸入道日新齋、當時士風の衰頹するを見て、自ら琵琶歌を作し、且謠ひ且彈じ以て子弟を奨勵し、爲に薩、隅、日の三州靡然として活潑の風俗に移れりといふ。爾來此曲武士間の愛づるところとなり、妙文妙曲續出し、今や隆盛の絶頂に達せんとす。月下樓上一曲を彈ぜんか、心神恍惚として恰も鐵火飛び刀鎗鳴るの感あるべく、其鬱勃せる抑氣を散逸せしめんこと、蓋し琵琶歌の特色なるところか、一言陳じて序となす。

征露第二年五月端午

鶯里庵に於て

小林紫軒識

吟者の心得

●薩摩琵琶歌を謠はんと欲せば、先づ第一に精神を静め、其の姿勢を正しくし、熱心を旨とすべし事。

●歌譜は其の歌意に従ひ自然の譜を貴ひ、喜怒哀樂を感別せしむるやう發音すべく、即ち悲しき事を謠ふ場合には自ら其悲境に在るが如く涙聲に吟じ、又勇壯なる事を吟する場合には身自から戰場に在るが如く活潑を旨とすべし。

●聲は口先にて美聲を發せんよりは、むしろ腹中より清き高尚なる聲

目 次

| | | | | | | |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 軍神廣瀬中佐 | 仁川の役 | 歸郷兵士 | 赤十字 | 征露の歌 | 金州南山 | 旅順の魁 |
| | | | | | | |
| 一五 | 三 | 二 | 一〇 | 八 | 四 | 一 |

を發することはつに努むべきなり
 左に歌曲かきよくの符號ふがうを示す、之れ單たんに初學者しよがくしやの手引てびとせしものなれば、
 若し妙旨めうしゆを味あじははんとせば適當てきたうの師しを選えらばざるべからず。

「 キ リ 、、、、 崩レトメ
 「 カ ン 〇〇〇〇 吟替ぎんがはリ
 「 ク ツ レ

| | | | | | | | | |
|-----|-------|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 松 | 吉野の奮戦 | 小楠公の参内 | 御夢枕 | 櫻 | 大塔宮 | 同二段 | 大楠公 | 召集令 |
| ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... |
| 六〇 | 五七 | 五四 | 五二 | 五一 | 四九 | 四四 | 三九 | 三六 |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|------|-----|-----|------|------|---------|------|
| 紀元節 | 喇叭卒 | 靖國神社 | 首途 | 水雷艇 | 哥薩克兵 | 月下の陣 | 梶村少尉候補生 | 旅順海戦 |
| ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... |
| 三三 | 三一 | 二九 | 二七 | 二六 | 二四 | 二三 | 二二 | 一八 |

菅 公 一三〇
 同 二 段 一三一
 神 之 御 山 一三四
 俊 基 東 下 一三五
 篠 原 合 戦 一四一
 同 二 段 一四四
 雲 龍 一四七
 豊 太 閤 一四九
 太 田 道 灌 一五〇

甲 斐 殿 道 行 一六一
 赤 星 一六七
 同 二 段 一七九
 同 三 段 一八三
 五 條 橋 一八五
 櫻 樹 の 詩 一〇七
 笠 置 山 一〇九
 古今和歌集序 一一六
 那 須 與 市 一二六

目

金こん 森もり 本ほん 同おなじく 同おなじく 桶ぶく 七 薩さつ 送そう

次 剛こう 蘭らん 能のう 三さん 二に 間ま 卿けい 摩ま

終 石せき 丸まる 寺じ 段だん 段だん 戰せん 落らく 瀉だ 別べつ

一九九 一九六 一八九 一八七 一八三 一七九 一七六 一七五 一七四

群むら 螢へい 薄うす 蟻あみ 花はな 廻めぐ 一ひと 千ち 花はな

か 陽やう 紅こう 小こ 本ほん 早はや に

す 雪ゆき 江かう 蛾が 葉ち 車くるま 薄うす 振ふる 風かぜ

一七三 一七〇 一六五 一六三 一六一 一五六 一五七 一五五 一五三

青年
愛吟
薩 摩 琵 琶 歌

第 貳 輯

尚武研究會編纂

旅順の魁

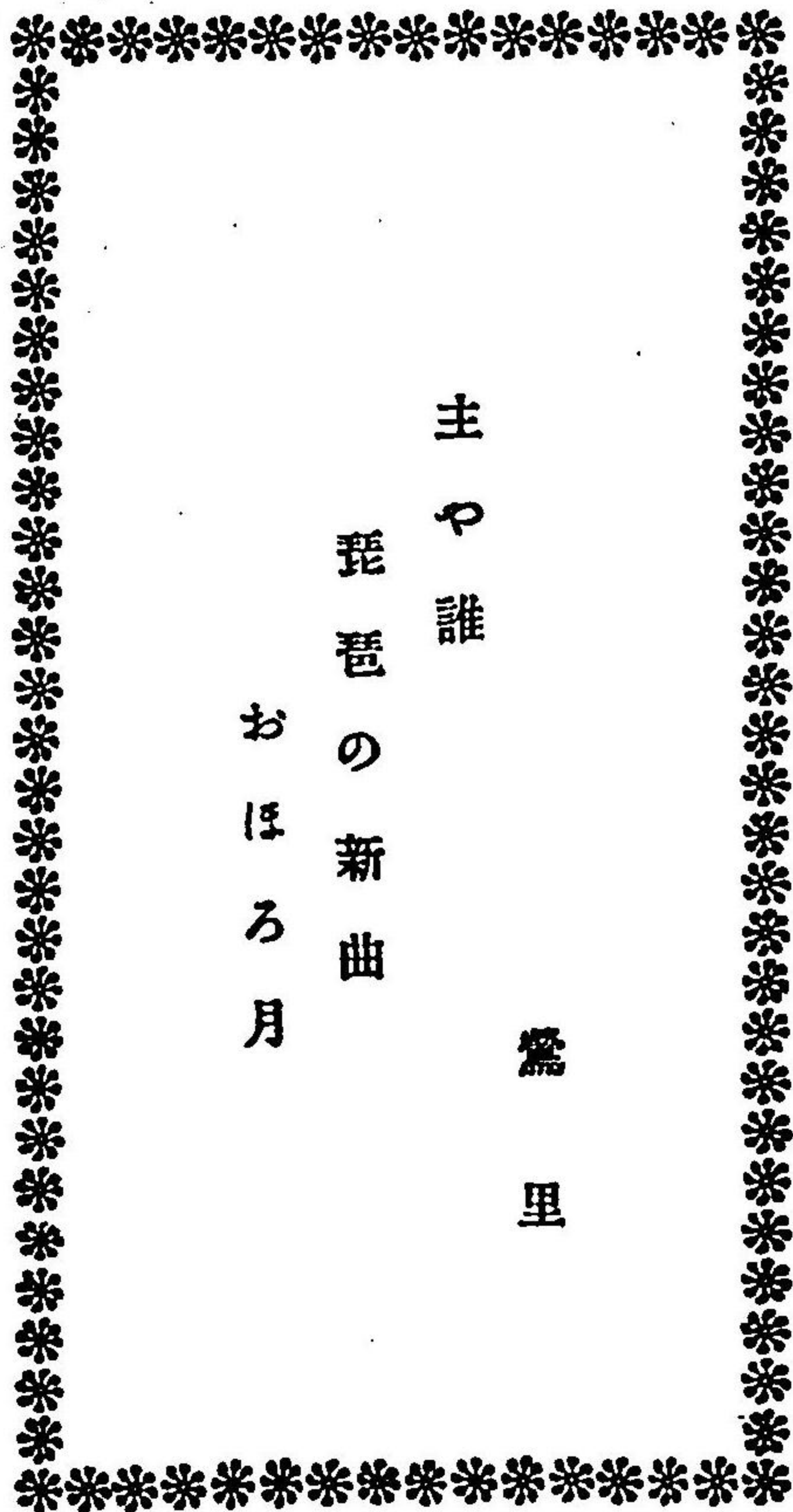
抑文明を平和に求め、東洋の治安を永遠に維持し、帝國の安全を保障するは、夙に我國交の要義なり、然るに露國は清國との明約、及び列國に對する宣言に背き、みだりに滿洲に占據して、韓國の保全を危ふせんとす、去れば 今上皇帝陛下は、露國の暴虐無道を懲し給はんと、
 『義憤の王師を進め給ひけり、時維明治三十有七年、如月六日の朝まだ

主 々 誰

琵琶の新曲

おほろ月

鷺 里



さ、我聯合艦隊は、運送船を伴ひつゝ、「佐世保の軍港乗出し、朝鮮海へぞ向ひしが、仁川港の沖合にて、或る一隊を引離し、陸兵護送の任務を命じ、残る主戦の艦隊は、三笠、敷島、富士、八島、其他の艦艦十六艘、驅逐艦をも引卒し、威風堂々、列整然、舳艦相銜み、進み行く、「指してゆくへは渤海の、灣港扼す旅順口、露西亞の主力の集まれる、軍港なりと知られたり、斯くて八日の夕刻旗艦より、我驅逐艦隊に對ひ、是より敵艦を撃沈めよ、一同の成功を祈ると信號ありければ、「將卒共に雀躍し、必らず成功すべきを誓ひ、意氣衝天の勢ひにて、浪を蹴立て猛進す、矢を射る如き朝潮に、立つは烟か白雪か、霧にまが

ふ曉の、空にとゞろく雷の音凄まじしや朧夜を、照らす電ひらめきて、影うすれゆく薄雲も、「東雲近く晴れ渡り、寄する漣音もなし、斯く三隊に列を備へ、真夜中頃に旅順間近く進みしも、警備怠る敵艦は、さながら眠る鷺の如く、我が隼のはやわざに、撃たれんとしも知らざりしが、我れが放ちし水雷に、たちまちバット水けふり、敵艦周章ふためきて、夢諸共に艦底も、打破られて傾きたり、されども數多の敵艦より、打出す砲彈猛烈にて、面を向けむ様なきも、大膽不敵の我軍は、豫て鍛へし腕まへを、顯はすときは今此處ぞと、「砲烟彈雨を物ともせず、敵艦めがけ發射する、水雷美事に命中し、まばたくひまに二三艘、

痛手を負ひて遁れしが、遂に沈没したりけり、此時殘餘の敵艦より、
 探海燈をふり照らし、我進路を妨げければ、こゝに襲撃の功を收め、
 旅順口の外洋に、我艦隊は集合し、凱歌あげて悠然と、南を指して引
 揚げしは、最と勇ましき有様にて、是れ開戦の捷利なり、是れ開戦の
 捷利なり。

金州南山

池 邊 築 象

扱ても清國遼東半島の、咽喉扼す南山は、難攻不拔の要害とて、所謂

一ツ夫これに當れば、万夫も進み能はざる、實に究竟の門關なり、然
 るに露軍は此の山巔に據り、堅固の防備を施して、我が皇軍を撃退せ
 んと、勇ましげにも待かけたり、已に我第二軍の一枚隊は、普蘭店一
 帯の地を占領し、敵の連絡を斷ちければ、徐に軍議を凝しつゝ、敵壘
 攻撃の準備をば爲したりける、一時こそ來れ臯月闇、二十五日の眞夜中
 に、全軍陣地を出汐や、逆巻き寄する勢ひに、さしも嶮岨の南山も、
 押し崩されんばかりなり、折しも一天搔き曇り、忽ち閃めく雷光に、
 といろき渡る雷諸共「暴風起り猛雨來り、咫尺を辨せぬ其機に乗じ、
 先づ金州城を攻め落せり、此時夜はほのく」と明け初めて、「狹霧を洩

る、朝日影、御國の旗章視る如く、「いとも目出たき光景に、味方いよ
く勇み立、山の麓に押寄せたり、敵は地の利に據れる堡壘に、大小
砲を備へ着け、其前面に數多の地雷を埋め、又鐵條網を張りめぐらし、
警備ヲサく嚴重にて、空飛ぶ鳥にあらざれば、たやすく近づくべく
も見へざりけり、されば我が勇敢なる軍隊は、「少しもためらふ色もな
く、第一師團を中央とし、第二師團を左翼に備へ、第四師團を右翼に
張り、「敵の陣地を取り圍む、やがて開らくや兩軍の、砲戦互ひに優劣
なく、いつか勝負もわらしをの、「血氣に誇る關東武者、意氣衝天の勇
を鼓し、敵陣目指し突撃せしも、筒先下りに打ふるす、敵の射撃に堪

りえず、あはれバタくと撃倒さる、残念なりと新手を替へ、幾度も
強襲を繰返へせども、鐵條網にさまたげられ、頗る苦戦に陥りたり、
我が左翼の第三師團も、敵の包圍になやまさされ、携へ行きし彈藥も、
残り少なくなりつれば、「むかしの名残いまこゝに、見せばや三河の武
者振をと、砲火を冒し突進す、折もこそあれ金州灣の沖合に、進み寄
りたる我艦隊は、第四師團に力を協せ、怒れるごとき猛彈を、敵の左
翼に打注げば、さすが頑固の敵軍も、遂ひにひるみて沈黙す、いざや猶
豫もあら碇を、渡り群がる浪速の勇士、巖巖絶壁物ともせず、最と易
げにも攀登り、首尾よく敵陣奪ひ取り、國旗をこそはあげたりける、か

くれはせじと第一第三兩師團も、驀然敵壘に肉薄し、劍尖まじはる激戦に、敵を縦横に薙ぎ散らし、「全く南山を攻め取りて、ドツとあげたる三軍の、勝鬨天地に響きたり、時に夕陽渤海に輝き、「明月和尚山の上にかゝり、日月ともに皇軍の、名譽の勝利をことほぎて、慰勞ふ如く見えにけり、嗚呼我が日本の本の國光は、世界に隈なく影さして、仰がぬものこそなかるらん、仰がぬものこそなかるらん。

征露の歌

小林 篤 里

開國こゝに二千年、外侮一たび受けずして、皇統のさかん極みなき、「我が日東の大八洲、その神國を憚からず、口腹の慾満さんと、無禮の翼羽ばたきて、爪牙を鳴らす鷺の國、西滿洲の野に荒れて、慘虐つゝのる振舞に、「天子一朝赫怒して、膺懲の軍發せらる、時は如月上十日、「万歳の聲轟々と、八千の艦艦海行けば、十万の貔貅山を行く、「あゝ弘安の其のむかし、蒙古の使切りてける、日本刀われにあり、咄々露國何ものぞ、「あゝ慶長の春元年、明の封冊破りたる、日本魂われにあり、咄々露國何ものぞ、それ邪は正の敵にして、露國は日本の讎なるぞ、正義のつゝみ鳴らしつゝ、「討てく憎き鷺の國、討てく憎き鷺

の國、城下の盟ひ立つるまで、討ちて國威を輝かせ、討ちて國威を輝かせ。

赤十字

松 島 松 溪

見渡す限り野も山も、みな砲煙にうづもれて、とどろく砲の音すこく、天や崩れん地や裂けん、陰々殺氣の其中に、「十字の旗こそやさしけれ、」吹立つ風はなまぐさく、紅るそめし艸の色、筋肉やぶれ骨くだけ、倒れしあまたの負傷者を、助けんとてや擔架もち、十字の旗を靡かせ

て、天幕さして荷ひ行く、此人々は日の本の、仁と愛とに富む婦人、眞白に細き手をのべて、流るゝ血汐洗ひさり、すくや縹帯白妙の、衣の袖をわけに染め、味方と敵のへだてなく、看護は朝夕いとまなく、「同仁一視ぞたのもしき、あやにかしこき文明の、母といふ名をふひ持ちて、いとねんごろに看護する、心の色は赤十字、心の色は赤十字。

歸郷兵士

皇國に仇をなし、世界の平和を搔亂す、惡逆無道の讐敵を「打懲せ

よと畏くも「我大君の下します、詔をばかしこみて、命を惜まらず身を
 忘れ、すがる妻子を振りすて、海路を渡り異國に、戈を假床の旅枕、
 すめらみかどの御恵に、むくひまつるは此時と、陸に海に戦ひて、我
 が日の本の御光りと、ほまれを共に擔ひつゝ、「凱歌謡ふて今日はいしも、
 目出たく故郷に歸るなり、祝へよろこべ諸共に、謝せよ里人感謝せよ、
 彼等の辛苦は幾何ぞ、あられ降る日も雨の夜も、氷の又くろかねの、
 火玉とびくる其の中も、國と君との其の爲めに、修羅の巷に出入し、
 万死の中に生を得て、「還り來りし兵士ぞ、祝へよろこべ諸共に、謝せ
 よ里人感謝せよ。」

仁川の役

明治三十あまり七とせの、如月初めの六日とや、我が海軍少將、瓜生
 司令官は、六隻の艦隊を率ゐさせ、佐世保の港乗出し、八重の潮路を
 蹴破りつゝ、「仁川さしてぞ進まるゝ、折しも如月八日なり、海上遙か
 に見渡せば、ほのかに見ゆる敵の艦、これぞコレイツにワリヤーグ、
 勇みて進む我が艦に、未練や老朽の敵艦は、港内深く潜みつゝ、戦か
 ふやうに見へざれば、我が艦隊は只敵の遠近を取巻きて、空しく時を
 過せしに、夜も早や更けて、打つや怒濤の音凄く、天には殺氣みなぎ

りて、深けゆく月に光りなし、狭霧こめたる海原に、浪の鼓か雷か、
彼れより打ちだす弾丸に、怒るは人と神のみか、我が軍いかでかため
らはん、「明くれば九日、我が艦隊は千代田艦を先鋒として、逆まく波
を蹴破りつゝ、火花を散らして進みける、とゝろく砲の音すごく、さ
かまく浪の音あらく、雨と降り來る弾丸を、我が艦隊は物ともせず、
忠義に身をや捨小舟、縦横無盡に走せ廻る、忠孝武烈をこととして、君
に仕ふる吾が軍の、打ち出す正義の弾丸に、あたりて、碎けぬ艦やある、
哀れ、二隻の敵艦は、音凄まじく碎けたり、茲に全艦隊を破滅して、制
海權を掌握し、天も崩るゝ萬歳の一聲は四方に起りたり、之れぞ我が

勝鬨のはじめなる、戦ひ初めて開かれぬ、水に漂ふ鷺の旗、旭に輝く
日の御旗、武威のほどこそ目出度けれ。

* * * * *

軍神廣瀨中佐

名も高き、渤海灣の咽喉なる、旅順口の戦ひに、籠る露艦を鎖さんと、
「閉塞隊の勇ましく、『自から之れに指揮をなし、二度の任務を全ふし、
名譽の戦死を遂げにしは、鬼中佐とぞ呼はりし、姓は廣瀨名は武夫、
頃は三拾あまり七年の、三月末の二十七、闇を冒して西の海、黄海威

遠の砲臺を、右と左に仰ぎ見て、進む必死の決死隊、其れと見るより
 敵艦は、すは敵なりと驚きて、探海電燈ひらめかせ、射手を揃へて散
 々に、打出す大砲の彈丸は、雨か霞か白雪の、降り注ぐが如くにて、
 千雷走り万雷の、とゞろき渡る其の中を、物ともせず勇々しくも、
 港の口に進み寄り、中佐は杉野兵曹長に、兼て積み來し爆藥に、點火
 の任を命じけり、忠勇義烈の兵曹長、艇艙に下りし其刹那、敵の水雷
 命中し、火藥は點火を待たずして、我手用ゐず爆發す、任務も己に遂
 げたれば、其本船を乗りすて、端艇に兵士を移らしむ、「其の時一人
 の兵曹長、杉野孫七見えざれば、中佐は聲を張り上げて、杉野はいづ

欠

MISSING

紀元節

明らけく、治まる御代もその昔を、忍べばいと畏しや、「皇御神の天
 が下に、降臨かうりんわらせたまひたる、「其の御光みひかりにあみせざる、暗き輩やからぞ多
 かりき、されば歴史れきせいかしくも、こゝに御心みこころつくされしが、その御威みゐ
 徳のなかくに、津々浦々に及ばぬぞ、是非もなき世の有様や、こゝ
 に彦火々出見ひこほとでみの尊と申し奉るは、御神みかみの御心みこころつがせられ、まだ服従まつらほぬ
 頑固者くなたまを、討ち平らげて皇の御基みもとをば開かんと、「御軍數多引連れて、
 日向ひよがの國を出たまふ、御舟路は恙なく、安藝より吉備きびを過させて、大

和に入らんとしたまへば、長髓彦といへるもの、皇軍を防ぎけり、「も
 とより期したる尊には、孔舍衛坂に戦ひたまふ、「あわさりながら畏し
 や、皇軍は勝すして、御兄君にてわたらする、五瀬の命は流れ矢に、
 御痛ましや倒れたまふ、尊は道をかへさせて、熊野の浦に御船を、う
 かへ給へばこれや抑も、あらし吹まき浪高く、御船は今にも危ふかり、
 始終を見たまふ尊の御兄、稻飯命、三毛入野の命には、ある、海原見
 そなはし、「怒の御聲高らかに、龍の神をば罵りつ、至軍にかはりて御
 命を、海の藻屑とかへ給ふ、しるしはこゝにあらはれて、御船は安く
 着きぬれど、盡さぬ歎きにかきくれて、大和に入らむ道もなし、右も

左も峙だてる、山また山の九十九折、路にかひたる荆棘は、尊をさへ
 へ奉つり、「日かげも暗き山路は、迷ひたまへる程こそあれ、「金色輝く
 鵝のきて、道を照らせば、八咫鳥の、御道しるべの奇瑞あり、されども
 仇敵は多くして、皇軍にまつるはず、尊をくるしめ給ふこと、いふも
 なかく、畏こけれ、「時に宇陀てふところに、兄猾、弟猾といふ兄弟あ
 り、弟猾はとくに服従へど、兄猾さらに従はず、詐り降りて尊をば、
 新の宮に迎へつ、玉座につくを合圖とし、上より押しして尊をば、弑
 し奉らん謀をば、弟猾さへて驚きつ、尊に由を告げれば、いたくも
 憎みたまひつ、道臣命をめし、兄猾誅伐せよかしと、仰せをさへて

畏まり、「その新宮に兇猾を、まづ入らしむれば詮方なく、昇るや否や
つるしたる、機械は落てわれとわが、謀の底に落入りつ、重き罪をば
身におふて、重き機械に死してけり、弟猾時に牛と酒、尊にさへげ奉
つれば、尊は御歌作らせ給ふ。

うだのたかきに、しぎわなはる、いすいはし、くちらさやる、こな
みが、なこそさば、たちそばのみの、なけくを、こさしひえね、うは
なりが、なこそさば、いちさかき、みのおほけくを、こさたひえね、
あ。

かくて尊は進ませられ、「戦ひたまふ度々に、捷を得させて終にまた、

長髓彦をも討ちたまひ、中つ國々漸やくに、尊に従ひ給ひけり、「され
ば尊は大和なる、畝傍の山の東南なる、檀原にぞ新宮を、築かせたま
ひて太柱、「ゆるぎなき世に御位に、即かせらるてふ御式を、めでたく
ここにあげさせ玉ふ、この尊こそ人皇の、第一代にましまして、神武
の帝と申し奉つり、この御歳を紀元の元年とは申すなり、「それより今
に至るまで、二千有餘の幾年に、皇帝の御威徳、たとへば八咫の御鏡
の光りを増して、「天長く地久しく、なほ後の世は幾万歳、君が世は濱
にこぼる、さいれ石の、巖となりて苔のむすまで限りなく、その年々
に大御位に即かせたまひし其日とて、紀元節をば祝しつ、榮えゆく

紀元節をば祝しつ、

榮えゆく

世ぞめでたかりけり。

召集令

小林 齋 里

妻は病ひの床に臥し、
願是なき子は飢に泣く、
老ひおとろえし父母は、
家の生計に益た、
じ、
「賤が伏家の門邊にも、
召集令は下りけり、
」
國に
報ゆる益荒雄が、
死すべき時は此時ぞ、
さはさりながら老の身の、
妻
と小兒は我れ往かば、
便りなき身を啣ちつ、
飢と病ひに斃れなん、
妻は枕を擡げつ、
往けよ我良人躊躇らはず、
老はとばく立出で、

皇國の爲とあるからは、
一人に後れな我が愛子、
家も妻子も思ふなよ、
折から小兒は泣やみて、
坊も一緒に國敵を、
討たんとばかりせがみつ
い、
廠の小拳ふりあげて、
父は日の出の山櫻、
うらやましさを坊もま
た、「
五尺の躰は彈丸の的、
生きて還らぬ我こゝろ、
去らばとばかり立
出る、
たけき姿はものゝふの、
大和櫻にたぐひてん、
首途のさまぞ勇
ましき、
首途のさまぞ勇ましき。

大楠公 (二段)

千時、建武三年五月初旬、足利將軍尊氏、同じく左馬頭直義大勢を引率し、都へ攻上る趣き、新田左中將義貞、急使を以て奏聞ありければ、主上大に騒がせられ、楠木判官正成を召され、急ぎ兵庫へ下降して、義貞に力を合はせ、合戦すべしと仰せられければ、正成畏まつて奏聞しける様、尊氏已に築紫九ヶ國の勢を率ひ、上洛することなれば、定めて戦ひは雲霞の如くにぞ候らはめ、味方の疲れ果たる小勢を以て、機に乗じたる大勢に懸合、尋常の如く戦かはし、味方の敗北は鏡にかけて見る如く、急ぎ新田を召させられ、前の如く山門へ、御臨幸あらせらるべし、左もあらば正成は河内へ下り、畿内の勢を以て、川尻を

差塞ぎ、尊氏を都へと進ませて、双方より兵糧の、道を断切らば、敵は次第に衰ふべし、其機に乗じ、新田は山門より推寄せ、正成は搦手より攻め上らば、朝敵を一戦に滅さんこと、何んの疑ひか候らはん、新田も此の所存と存じ候へとも、敵を眼のあたりに受けながら、軍もなさで引上げんこと、人の思はくも如何ならんと、終に兵庫に支へしならん、合戦は兎も角も、軍は始終の捷こそ肝要なれ、よくく叡慮をめぐらせられ、公義を御定めらるべしと、奏聞ありければ、防門の宰相、清忠申さる様、正成の云ふところ、其謂はれなきにあらざれども、征討の爲めに差下たる節度使が、未だ戦ひを爲さざる先に、帝

都を捨て一年の内、兩度まで山内へ、御臨幸あらんこと、一つは帝位の輕さに似、一つは官軍の道を失ふなり、凡そ戦ひの初めより、味方の小勢を以て、敵の大勢を責めなやましたるは幾回ぞや、是武略の勝れたるにあらずして、全く聖運の天に叶へる所以なり、然れば戦を帝都の外に決し、鐵鉞の下に滅さんこと、何の仔細あるべきぞ、只時を移さず、正成罷下るべしと仰出されける、正成今は詮方なしと、五百餘騎を従へて、五月十六日都を立つて、急ぎ兵庫へぞ下りける、正成の一子正行は、今年十一歳なれども、父の決意を察せられ、何國までもと従ひ行く、正成思ふ仔細のあるなれば、櫻井の宿に於て、正行を

膝元近く召寄せて、夫れ獅子といふ猛獸は、子を産みて三日を過るにあたり、數千丈の絶壁より、谷底深く投げ捨てる、其子勇猛ならば、中より刎ね歸り、無益の死をなさぬといへり、況んや汝も人界に生を得て、已に十一歳にも成ぬれば、父が教は能く守るべし、此度の合戦は、天下安危の定るところ、我れ討死したる其後ちは、尊氏天下を縦横し、叡慮を惱し奉つらん、汝正行よ、此不義の勢に恐れ、身命を助からん爲め、多年の忠烈を捨て、彼れに服従するなかれ、一族郎等の者、生き存らへてあるならば、金剛山に引籠り、敵寄せ來りなば、命を由基が矢先にかけて、義を紀信が忠に比し、必らず一步も退く事なかれ、此

の肌はだの守まもりは都責みやとらめありし時、下くだし賜たまひし繪旨えんしなり、是れを汝にに譲ゆづるべし必かならず父ちちが志こころを繼つぎ、帝きみに忠義ちゆうぎを盡つくしなば、是これを親おやへの孝かうなりと、申し含たくめて正行ちゆうぎやうの、顔かほのあたりに手てを當あて、是れが此世このよの見納みおめぞと、思おもへば猛たげさますらすの、心こころも今は亂みだれ髪かみ、かさ上げつゝも幾回いくたまか、振返ふりかり見て泣なくも、名殘なごり多おほげに分わかれける、世よの盛衰せいさいを觀察くわんさつし、一子いっしを殘のこしてなき跡あとまでの、義ぎを勸すすむ、心こころの内うちこそ殊勝しゆしやうなれ。

同おなじく (二段)

去さるほどに、正成まさしげ兵庫ひんぐうに着ききければ、義貞よしただ對面たいめんし給たまひて、叡慮えいりょの趣おもき尋

ね問とはれける、正成承ちゆうしやうりて勅諭ちよくせんの様ようと、己おのれが所存しよぞんを悉ことごとく語かたりける、時に五月二十五日 煙波えんは淵ふみ々くたる海うみの面おもて、十四五里しよごりばかりがほどに數万あまねの、兵船帆へいせんはを舉あげて寄せ來きる様さまは、左ひだりも赤壁せきへきの戦いくさひ黄河くわうがの兵へいも、是こゝには過すぎじと思おもふところに、須磨すまの上野じやまのと鹿松しかまつの岡おか、鴨越ひよとりせえの方かたよりも二ツ引兩ひかりんらうに四よツ目結ゆひ、左ひだりり巴等とつの旗はた、五六百ひゃく旒ゆが程朝風あさかぜに縹あざへし、雲霞うんかの如ごとく寄せかけたり、正成まさしげこれを打見うちみて、舍弟だてわい帶刀たいてう正季ちゆうきに申ます様さま、敵てき前後ぜんごを廻まる味方あかは陣じんを隔へだてたり、今は逃のがれぬところぞと、先まづ前まへなる敵てきを追おまくり、後うしろの敵てきと戦いくさはん、正季ちゆうき是こゝれを承うり、我手わがて七百餘しちひゃくじゆ騎きを前後ぜんごに備そなへ、大勢たいせいの中うちへ割わつて入いる、直義ちやくぎの兵者へいしやども菊水きくみづの旗はたを見て、

能き敵なりと思ひければ、取籠て討んとしけれども、正成正季東より西へ切つて通り、北より南へ追なびけ、能き敵と見受れば、駈け並べ、組で落ては首を取り、雑兵の奴輩は、一太刀打てかけ散し、正成と正季と、七度合ひ七度分るゝ其こゝろ、偏に直義に近づきて、組で討んと思ふにあり、終に直義の五十万騎は正成が、七百餘騎に追立てられて、また須磨の上野の方へと引返へす、直義の乗たる馬は、鏃に踏立て、ひるむところを正成が、軍勢早くも足を見とめ、いざ討取らん馳寄るを、薬師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にて返し合せて、駒より飛んで下り、長刀の石突を取延て、かゝる敵の馬の平首、むなかひの引廻し、

切つては刎たふし、倒しては刎ね、またゝく暇に七八騎が程は切て落す、其間に直義は、馬を乗替てはるゝ、落延び得たりける、曾氏はれを見て、荒手を入れかへ直義を、討たすなと下知あれば、吉良石堂上杉の、人々六千餘騎にて湊川の東へ走出で、跡を切らんと取巻ける、正成正季又取つて返し、此勢に渡り合はせ、打つ打たれつ、火花を散らして戦ひしが、味方も次第ゝに打れける、残る兵は僅か七十三騎とぞなりにける、此小勢にて敵を打破り、落なば落つべかりけるを、正成都を出しより、思ふ所存のありければ、皆打死と覺悟して、湊川の北に當りし一村へ、七十三騎引揚げて、休るふ内に一族は、軍兵ど

もと諸共に、腹搔切つてぞ失せにける、正成正季に打向ひて申すやう、
そもく最期の一念に依り、善惡の生を引くといへり、九界の間に何
れか、願ひなると問ひければ、正季は、ぞえみ、七度人間に生れ來て、
朝敵を滅さんと思ひ候へと申ければ、正成いと嬉しげの氣色にて、罪
業深き惡念なれども、我も箇様に思ふらん、いざらば同じく生を替
へ、此本懐を達せんと、誓つて兄弟差違へ、一つ枕に伏しにける、嗚
呼此最期こそ、實に武士の鏡なれ、實に武士の鏡なれ。

* * * * *

大塔宮

小 林 鶯 里

帝業未だ成らず、身は是れ楚囚、直義何者ぞ猥りに帝敕を矯め、我を
捕えて土窟に投ず、枝葉やうやく枯れて根幹終に仆れん、尊氏何者ぞ
猥りに父命を矯め、我を捕へて土窟に投ず、一葉を剪つて陀羅尼を誦せ
ば、點滴座を濕ほし、鬼氣人に迫る、身は是れ囚虜、憤怒また何者ぞ
堪へん、妄執一度び胸に燃えては、經文の功德何かあらん、忽ち卷を
抛つて悲憤慷慨、嗚呼また嗚咽歔利、何者の兇漢ぞ手に白刃を提げ、
身を屏めて後より窺ふ、刹那電光閃めく、帝子初めて覺り、愕き且怒

る、「汝何者ぞ、咄無禮なる、我は天子の子なり、「天子か皇子か我は知
らず、將軍命あり我は是れ武臣、君請ふ容せ、「手を伸べ足を擧ぐれば、
帝子すでに膝下に至り、力何んぞ能く抗せん、白刃將に加はり、三寸
絶えんと欲す、「是か非か我は知らず、唯だ維れ命のまゝ、我跳また忍
びず、而も夫れ命なる哉、徒に我を恨みぞ、「帝子怒心頭を衝き、顔貌
朱よりも赤く、「忽ち身を躍らして刀を嚙む、刀尖三寸折れて口に留ま
る、嗚呼鎌倉山の土窟、長へに鬼啾々。

* * * * *

櫻

敷島の大和心を人間は、旭に匂ふ山ざくら花、あゝわが邦の花なれ
や、「花は櫻木人は武士、やくが如けん暑き日の、苦熱を忍び更にまた、
凍るが如き冬の夜の寒さを胃し、春風の吹くをば待ちてうるはしき、
花は芳野や嵯峨御室、嵐山との名はあれど、散るを惜まぬ風情なり、
「見渡せば、柳は緑花は紅、都の春に武士も、うかれ出でつゝ、狩暮らし、
うつばにさすや花一枝、やさしく見ゆる程こそわれ、いつしか思はぬ
雨風の、あれにあれくるつれなさに、散るを覺悟の花や人、「風に狂ひ

て散際の、實にうるはしや勇ましや、ほかに類ひもあらし吹く時の來らば潔よく、「花に劣らぬ大和武士、散れや散り行けその命、惜まらずてよ大君のため。」

* * * * *

御夢枕

あな畏こきやおは君の、夢にみなみの楠は、「一天万乗の君の御召しにわづかりて、時を移さず笠置の行宮にぞ参りける。」帝は寂感なゝめならず、藤房の卿をして仰出だされけるに、逆賊北條高時は、奢りに長

じて天下の政をみたり、万民塗炭の苦しみを受く、しかのみならず暴威につのりて、大逆を圖るに至る。「今は天下の事をわけて、卿に委ぬ速かに、逆賊を亡ぼして叡慮を安んじ奉つれ、卿が策いかに〜とありければ、正成謹んで勅答したてまつるは、逆賊暴威に耽るとて、御心やすく思し召せ、順を以つて逆をうつ、勝たずといふの理あらんや、賊に匹夫の勇ありとも、これを計るはいと易し、「さはさりながら勝敗は、兵家の常の事なれば、よしや官軍破るとも、大御心は艱ましぞ、「臣ながらへて世にあらば、必らず賊を滅ぼして、大御心を休ましめんと、御受け申してまかり出でぬ。」さして行く、笠置の山を出でしより、

天が下には、かくれ家もなし、一度びは西の海邊にかくろひし、天つ
日かげも後つひに、暗き雲霧かしひらき、めでたく還幸ましますせ、
「わが大君の楯となり、わが大君の御船とも、なりてつかへし楠ぞ、臣
のかいみと語り傳へん。」

小楠公参内

正平四年正行は、芳野の皇居に参内し、四條隆資卿を経て、心の中を
ぞ奏しける、先臣正成勤王の軍を起し朝敵を、打滅ぼして先帝の、叡

慮を安め参らせし、「その後ら天下また亂れ、逆臣尊氏築紫より、都を
さして攻上り、正成覺悟を定めけん、終に津の國兵庫なる、湊川にて
潔よく、戦死をこそは遂げたりき、「その時正行やうくに、十一歳に
なりぬるを、軍の場へは伴なはで、河内へふくり歸しつゝ、敵を亡ぼ
しわが君の、御代になせよと細々に、遺し、訓への言の葉は、今なほ
耳に止まれり、然るに正行今ははや、年も廿歳に成ければ、今に及び
て朝敵を打亡ぼさで過しなば、いつをか待たむ人の身は、思ふに任せ
ぬ習ひにて、病ひのために死しもせば、君の爲には不忠なり、父の爲
には不孝なり、「されば此度び師直と、手痛き軍つかまつり、彼れが首

を正行が、手に打取るか正行が、首を彼れに取らるゝか、二つの中に
 戦ひの雌雄を決し申すべし、「今度の軍正行が、必死の覺悟に候へば、
 今生にては今一度、龍顏拜し奉り、御別れをば告ぐるなりと、申しも
 敢へず、涙をば、鎧の袖に注ぎつゝ、義心氣色にあらはれぬ、「帝は御簾
 高くかゝげさせ、近く召されて正行よ、此ほど數度の戦ひに、敵の勇
 氣を摧きしは、叡慮を慰するに足るぞかし、「父子累代の勳功は、深く
 感ずるところなり、朕は汝を股肱とす、必らず命を全ふし、王家の重
 きに任せんと、畏こき詔ありければ、「正行首を地に着けて、これや最
 後の參内と、思ひ定めて退ぞさぬ、かくて御暇申しあげ、如意輪堂の

壁中に、三百騎の名を書き連ね、其奥に鏤みて、「かへらじと兼て思へ
 ば梓弓、なまの數にゐる名をぞとゞむる」と一首の歌を書き残し、芳野を
 出で、勇ましく、四條畷に向ひける。

吉野の奮戦

櫻井三世

抑も護良親王は、逆賊足利尊氏を、追討せんと叡旨を得、元弘三年春
 の頃、吉野の城に義兵を擧げ、今や來れと待つ折しも、「賊軍およそ六
 万餘騎、入道道蘊將として、雲霞の如く攻め寄する、此方の城の其峯

に、白と赤との錦の御旗、「深山おろしに吹き靡き、花をしきたる如くにて、山根に列なる官軍は、甲の光まばゆくも、星をいたゞく有様と、鎧の袖を連ねしは、錦繡敷ける如くなり、然れば賊軍二階堂、兵を指揮して攻しかど、七日七夜の其あいだ、落つべき様子見へされば、賊軍謀略めぐらして、在處くへ火を放ち、短兵急に攻めければ、「不意を討たれて味方のものは、一時に唖と崩れ立つ、これを見るより賊軍は、ますます勢ひ奮ひつゝ、聲を合圖に込入つたり、此時護良親王は、藏王堂の御座にあり、早是までと覺悟して、赤地の錦の直垂に、緋威の鎧を召され、三尺五寸の小長刀、小脇にかひ込み給ひつゝ、龍頭の冑

をつけ、強兵およそ二十人、前後左右に従はせ、群る敵の只なかへ、走り入りつゝ東西に、薙立く斬まくる、其猛勇の勢ひこそ、鬼神も逃くるばかりなり、此の有様を見るよりも、賊兵大いに怖れつゝ、又向ふものこそなかりけん、「やがて親王は、藏王堂の大庭に、戻りたまひて御身をば、あらため給へばいたましや、御身に立ちし箭は數ヶ所、其他諸所に傷ありて、「流血淋漓としたるも、更に臆する氣色なく、「大盃二度び傾けて、勇氣凜々意氣揚々、これぞ眞の剛傑と、仰がぬものこそなかりけれ。

其時木寺相模とて、家臣の中に勇士あり、「敵の首級を太刀先に、貫き

我等如きもゆるされて、聞くもなか／＼面白や、鼓は四海の浪の音、
 笛は龍王の吟ずる聲、なほ高砂の尉と姥、戀ぞつさせぬ妹脊とかや、
 神の御前鈴鹿山、悪魔を拂ふのみならず、弓矢のはまれ残されし、田
 村麻呂の御威勢は、今が代までもゆづり葉の、しめひき廻す井筒より、
 汲めどつさせぬ若水は、老ひ、養ふ便とかや、扱又其次は春の花、都
 に聞ゆる三條の小鍛冶宗近は、心正直にして神妙に叶ひし名刀を、造
 り出して今は又、太平の代となりて、古き詩にもあるぞかし、長生殿
 の内には春秋に富み、不老門の前には月遅しと申せしは、皆波の心を
 ぞ學ばれて、今此御代と云ふつげの、とり／＼なれや梓弓、矢竹心の

かけて歌うたひ、舞ひをまふてぞ供せしは、目さましかりし次第なり、
 『親王御心決しつゝ、早討死と覺悟したまへば、村上義光固く諫め申し、
 一先づ吉野を落玉へ、臣乞ふこゝに止まりて、御身かはりをぞ仕まつ
 らんと、切なる言葉に親王は、やうやく聞しめさせ玉ひ、遂にこゝを
 ぞ逃れつゝ、高野の山へと落ちたまふ。

松 囉

新玉の、歳立かへる春の日に、我が齡千歳經る、松囉とて數ならぬ、

一つなり、又英雄の交りに、頼みある中の酒宴かな。

甲斐殿道行

寝られぬまゝに思ひ立ち、出るぞ名残三日月の、廻り逢はぬも定めなしと思へども、また何時の世の何の時に、君が面影を見るよしも、ありなんとまた東雲に立出る、「頃しも春の朝ばらけ、垣根に言問ふ鶯の、鳴く音に花や咲さぬらん、さりとて、艸は春あらば、又も昔に成ぬべし、二八の秋の紅葉こそ、惜むに甲斐はなかりけりと、思ひな

ぞらへ行ほどに、浮世をめぐる車町、緑の末は糸ながき、柳の町をも打過ぎて、行けば程なく戸柱の、橋の上より見渡せば、出入る船も我が如く、焦れて物や思ふらん、甲斐なき戀は諏訪の山、前は稻荷の後迫り、愛宕山をも右手に見て、我が身の上は生殺し、たとへ行くこそ果敢なけれ、命あらば又來ぬ春と行ほどに、立寄る影もなど更に、今はなき世に業平の、名ばかり残る涼し松、よしや吉野の花さかり、君ゆへ見るぞ果敢なけれ、「實にや宮捨人も、華にはなぞか隠れ家の、卯月も未來菖蒲谷、東をはるかに詠むれば、其名にも似ん鐘の聲、なき寺山は戀する人の住家にて、遠路の里の立けぶり、是こそ春の霞かな、

木隠れに行く道なれば、人目の關や恐びつゝ、心細くも通山、暫しとて、人や立寄る柴の本、是より先は下り坂、逢ふ坂など、名をいはい、誰が踏初めし首途とも、思ひなぞらへ行ほどに、名は白金の小石原、真砂の数はつくるとも、思ひは果じ何までも、彼の明神を伏し拜み、「南無や明神願はくば、空吹く風の音信に、聞き及びにし與市様を、露の命の消果ぬ間に、廻り逢はせ給へかしと、深く祈誓を申しつゝ、見下し見れば春かすみ、棚びく雲の絶間より、遠山の櫻はのかに見へて、深山木の、其梢とは知らざりし、櫻は花にあらはれにけりと、有し歌にも記さるゝ、頃しも春の朝ぼらけと打詠め、脇元の宿を過行けば、

絶えず流るゝ思川、うづら鳴くなる鎌田原、行に果なき十日町、左の方は南無薬師、流れの水も潔よし、折ふし満潮なれば竿さし渡す海士小船、身は諸共に焦れて、思ふ心の底ふかし、實にや忍ぶに同じ、心の人もなければ、行末も知れぬ有様を、話に斯くと岩の原、何時かは君を松原の、苔の細道ふみわけて、思ふ加治木にぞ着きにけり、早や珍宗寺の鐘の聲、君が在家や告げぬらん、人の別れや急ぐらん、君が在家は常盤にて、今三洲の萩原を尋ねゆく、門のはとりにぞみて、與市様くよと問けれど、左しも思ひも甲斐もなし、折ふし他行なりしかば、力なくして立歸らんとは思へども、此處まで來るしるしまで、

門かどの扉とびらに書かばかり、其文いひに曰い、聞き及およびしに依より、遠路とほを忍しのび此こゝところま
 で往來ゆきすと云いへど、不縁ふゆ第一だいいちにして逢あふことを得えず、空からしく歸かへる道みちす
 がら、君きみに於おては恨うらみなし、我われが浮世うきよの若わかやさ得えるがゆへ、淋さしく夕ゆふ
 べを送おくりしが、又何いづ時の時ときにか期きさんかと、書かかいて、擲な節せつを與あり市いち様
 にはねかけて、稚兒ちごゆへに今朝けさの出船いせに乘のり遅おそれ、人ひとこそ知しらぬ陸くわを
 行いくかなと、歌うたひ歸かへりし形かたちを、見みるにも最いといいあぢきなや、心こゝから
 心こゝと思おもはせて、身みを苦くるしむる我身わがみかな。
 *
 *
 *
 *
 *
 *
 *
 *

赤あか星ぼし (初段)

國くにを申ませば肥後あつたの國くに、在所あつた記きるせば割府わりと云いへる、物ものも在所あつたに赤星源
 次つぎ綱明あきらとて、弓取ゆみ一人ひとりおはします、しかも其こゝる肥前方あつたに、味方あつた召まさ
 れける、其歲としの年號ゆゑ申ませば、天正九年辛巳てんしやう、頃うは卯月七日うづきと申ますに、
 肥前方あつた龍造寺山城守りゆうぞうじやましろのかみ隆信方たかのぶより、使者ししやの参まりて申ますやう、如何いかに申まさ
 ん赤星殿あかぼしどの、まことに肥前あつたに味方あつた召まされるものなれば、人質ひとぢ賜たまはれ赤星
 殿どのと、御意ごい下くだる、赤星あかぼしうけたまはり、扱さては中々なな國主くにぬしの御意ごいとは申ませど
 も、誰たれをか質ぢに参まらせん、使者ししやの詞ことばに歳としは十四じゅうしに成ならせ給たまふ、若松殿わかまつどの

とて若のある由、肥前屋形に隠れなし、彼の若質にくと御意下る、
 赤星うけたまはり、扱はなかく若は一人候へども、彼の若質に出し
 ては、後の歎きは如何せん、されど又、國主の御意には叶ふまじと、
 若を召寄せ御尋ねあれば、若の詞に、某國にありながら「二人の親の
 御奉公、國の爲めとなるならば、今日唐土までも参るべし、質に渡ら
 ん事は御心安く思召されとて、やがて十八人の士を、御供に召つれた
 まひ、肥前に御渡りなされ、佐賀の御内に伺候あるこそ哀れなり、い
 まだ三日も過ぎざるに、重ねて使者の参りて申す様、如何申さん赤星
 殿、歳は八ツに成らせ給ふ、安千代殿とて姫のある由、肥前屋形にか

くれなし、彼の姫質に渡し給はれ、左もあらば、兄の松若は國へ歸す
 との御掟なり、赤星うけたまはり、扱はなかく姫も一人候へど、若
 を質に出してさへ、幼少の姫までも質に出しては、母君が歎きは如何せ
 ん、されど又、國主の御意には叶ふまじと、姫を召寄せ御尋ねあれば、
 姫の詞に、某國にありながら、二人の親の御奉公、兄に替り國の爲と
 なるならば、京鎌倉までも登るべし、況んや肥前は近き間と承はる、
 質に渡らんことは心安く思し召されとて、やがて士二人女中六人を御
 供に召つれ給ひ、肥前に御渡りなされ、佐賀の御内に兄弟ともに伺候
 あるこそ、何より物のあはれなり、「これは扱置き茲に又、肥前に於て

強顔士、隈部左馬之介親興と申せしは、赤星殿と界の論を召されしが、赤星殿より三百餘町をふみ取られ、兼ねて此事を遺恨に思はれて、如何にもして赤星に腹切らせんと思ふ折節の事なれば、之れぞよき折と心得て、直ぐに隆信殿へ作り文を上げにける、「隆信この文を御覽なされ、もつての外に腹を立て、扱はなかく赤星は、兄弟の子供を質に取られ無念さに、薩摩に味方肥前に二張の弓を引くとかや、其儀ならば彼の兄弟は此所へ置きても如何せん、又國へ歸しても如何せん、肥前に於て法ある法度の死置出張付よと御意下る、痛はしや兄弟は、肥前屋形に三日も置かずして、肥後と肥前筑後の境南の關竹の世原へ

送りあるこそ哀れなり、松若詞に如何に申さん、隆信様某兄弟を御殺しあるならば、肥前屋形にて只一太刀に殺し給へ、さあらばとて、士がへりがき越へて隠れ忍びは致すまじ、夫れ武士は壘の上うへに育ち、野原に死すを本意とは申せども、某兄弟は夢にも知らん野原にて、長く浮名の立つと思へば、嗚呼之れが一つのいかなり、斯くは云ひつゝ、某は、男の身にて苦しからず、幼少の安千代は國へ御歸し給はれと、日には七度のわびをなす、姫の詞に如何に申さん、隆信様、某は女をんなの身にて苦しからず、兄の松若は赤星が家の世つぎの事なれば、國に御歸し給はれと、日には三度のわびをなす、隆信御掟に如何に兄弟科しかりな

き隆信を恨み給ふな、謀反心の父の赤星を恨めとのたまへば、姫の詞
 に如何に科なき隆信様を恨み申さん、況してや父の赤星をも恨み申さ
 ん、恨のあるは中より作り文を上げにし隈部殿こそ今生後生の恨みな
 り、松若詞に如何に安千代何某の子孫と云つて女にこそは生れけり、
 人を恨みては如何せん、死出の山三途の大川左京が指造も諸共にと、
 悦び給ふぞ哀なり、去れば松若其日の出立は何時に勝れて花やかに、
 先づ肌よりは白地練絹紫染に金糸の小袴シツカと召され、頓て十八人
 の士を御側に召され「如何に方々鳴をしづめて聞き給へ、某兄弟は身
 に覺へなき科に上意をのたまふなり、迎も上意は免るまじ、御身達は

暇取らする何國の里にも落ち行きて、我にましたる強き主人を頼めと
 のたまへば、十八人の士は皆頭を地につけ、詞を揃へ、嗚呼情なき若
 君様の仰かな、士が強き時は主人と頼み、今弱きとて君をふり捨て、
 は如何せん、兎にも角にも君諸共にと申し上れば、松若殿は斜に悦び、
 頓て十八人の士へお盃をぞ賜はりける、姫の其日の出立はいつに勝れ
 て花やかに、其頃肥後に流行りし十二小袖を召されしが、たけと一夜
 の黒髪は、月の輪形によせ給ひ、頓て六人の女中を御側に召され「如
 何に方々鳴をしづめて聞き給へ、某兄弟は身に覺なき科に上意をの
 たまふなり、迎も上意は免るまじ、御身達は千に一ツと隆信様より暇

賜はるものならば、割府の在所に落ち行きて、二人の親の御前に参り、
某兄弟斯く成り果たる有様を一事も洩さず申上げよとのたまへば、六
人の女中は皆頭を地につけ涙を流し、誰こそ御返事申す者もなし、頓
て松若殿は檢使を御側に召され、如何にはたの板は西へ向けると申せ
ども、某兄弟は肥後の方へ向けて賜はれ、左もあらば割府の在所に二
人の親のあると思へば、嗚呼吹き來る風迄なつかしや、檢使如何にと
ありければ、痛しや兄弟も運や盡さるらん 其の日の檢使隈部殿にて
ありければ『如何に兄弟はたの板は往古より傳はれる儀式なれば、東
へ向けては天道に恐れあり、御身達兄弟迎ても西へ々々とありければ、

痛しや兄弟は最早力に及ばずと、割府の方を三度招きてはたの板へぞ
召れける、三日が間小歌拍子にて夜をも晝をも暮し給ふ、痛しや姫君
未だ幼少の事なれば四日に當る、扱も酉の上刻「竹の代原の朝の露と
消へ給ふ松若詞に、如何に安千代未だ此代にあるかなきかと問ひ給へ
ば、答ふるものは竹の世原の松風に、空飛ぶ鳥の羽音斗にて、愈々哀れ
は増さりける、松若殿も次第々々におとろへて、七日に當る、扱も午
の上刻竹の世原の朝の露と消へ給ふ、御側十八人の士は此由一目見て
最早力に及ばず皆一同に肥前屋形に亂れ入らんとは思へども、多勢に
無勢力に及ばずと皆はた下へ打寄て、腹十文字にかき切て、朝の露と消

へにける、隆信殿此由聞し召し直ぐに六人の女中を御前に召され、如何
 に方々御身達は暇取らす何國の里にも落ち行けとのたまへば、女中
 勝の前御返事申す様、嗚呼情なき隆信様の仰かな、某が廿の時より御
 乳を上げにし姫君さへも御助けなく、數ならぬ我々共へ御暇賜はれば
 とて國へ落行き如何せん、兎にも角にも姫諸共にと云ふより早く皆思
 ひくく清く自害を致さるゝ、未だ惜しかる歳の勝の前が廿八、侍従
 の前が廿六、壽の前が廿五、侍従廿三、少將十八、小櫻が十六、何づ
 れもおとらん花盛り、夜半の嵐に誘はれて、散りて行くこそ何より物
 の哀れなり、是は扱置茲に又、隈部副島田尾の人々は、此序に赤星が

領地を手取りにせんと、皆思ひくく我が手斗を引具して、割府の城
 を十重廿重に取圍み『吐氣の聲をドット揚げければ、赤星殿は此由一
 目見て、以の外に打驚き、扱は中々夢かうつゝかまぼろしか、夢なら
 ばさめても行け、うつゝならば消へても行け、まぼろしならば暫しが
 程は消へやらで、愈々哀れは増さりける、去れど又斯くては叶ふべか
 らずと、猛く心を取り直し、城門へ火を掛けて天も霞と焼き捨る、住
 み馴れし割府の城を袖白雪と振り捨て、八代差して落ちて行く跡より
 は「敵は群がり繁く慕ふて追掛る、茲に赤星の郎等村上兵部左衛門綱高
 とて大剛の勇士なりしが、此由見るより斯くては叶ふべからず、某一人

跡にふみ止まり防ぎ矢射て人々を落し申さんとして、後陣遙に引下り、頓て大音揚げて名乗る様、茲に扣へしは赤星の郎等に村上兵部左衛門綱高として名を得たる強弓の精兵矢次ぎ早の手さゝなり、汝等共よく見よかゝる矢先きに敵は嫌ふまじと、五人張に十五束差し取引津め射る程に、生死は知らねど三二十六騎は射て落す、最早矢種も盡さぬれば、持たる弓をガラリとなげ捨て、三尺六寸の大太刀を抜き持て、群がる大勢が中へ割て入り、當るを幸ひ爰を詮度と世に烈敷、火花を散して攻め戦ひしが、向ふ敵七八騎は打取り、其身も數ヶ所のさすを蒙り、迎も叶はぬ事なれば、駒より飛下り小高き所へ馳上り、腹十文字かき切て、

朝の露とぞ消へにける、未だ惜しかる歳の卅一、惜しまん人こそなかりける「漸々此際に赤星殿は虎口を逃れ、八代差して落ち給ひ、八代の慈眼寺正福寺彼の二ツの寺を深く頼ませ給ひ、終夜百万邊を唱へ、兄弟の追善を營み給ひて三歳が程は日月送りておわします。

同 (二 段)

去程に、斯くて三歳も過ぎ行けば、徳の口より夜船に召され、薩摩を頼みに下らせ給ふ、順風よければ帆を揚げて程もなく出水「米の津に着せ給ふ、其頃米の津は、島津義虎公の御持なれば、直ぐに案内乞ふ

て義虎御前に参り、如何に申さん義虎殿、某は肥後に於て赤星源次綱明と申すものなり、三歳以前肥前に於て強敵士隈部左馬之介親興と申せしもの、ざん言に依り、二人の子供を無慘に殺され、其上敵に攻められ未だ太刀も揚らん次第なり、何卒肥前方に一度弓を引て給はれ、義虎殿と涙を流して頼みければ、義虎公聞し召し「扱は中々代に無慘聞くよな次第かな、其儀ならば是より北に當り、大口と云へる在所に新納武藏の守として弓取一人おわします、彼を深く御頼みあれと、案内一人付け給ふ、赤星殿は力に及ばずと、涙と共に義虎御前を下りける、夫婦打列れ、面は月日にさらされ、すそは露、袖は涙に打しめり、伊

勢編がさで顔隠し、代は逆に竹の杖、つくくくと兄弟の子供の事が彌増る、名所舊跡尋れば、音に名高き盤若寺越を軽く召され急がせ給へば、此處は早菱刈表大口に成りぬれば、直ぐに案内乞ふて武藏殿に御對面なされ、彼の事頼み給へば、武藏殿承り「扱は中々世にむさん聞くよな次第かな、其儀ならば是より東に當り、日州佐土原と云へる在所は島津中務家久として軍奉行のおわします、彼を深く御頼みあれ、左もあらば此數ならぬ武藏めも一番に参り、島原にて功名致さんと、左も潔よく返答し、案内二人付け給ふ、赤星殿は又も力に及ばずと、直ぐに大口を御立ち成され、名所くを尋ぬれば、音に名高き高鼻越を軽く召さ

れ、眞幸五ヶ所をかけ通り、白鳥山を伏し拜み、野尻紙屋を馳せ通り、急がせ給へば程もなく、日州佐土原にぞ着せ給ふ、直ぐに案内乞へて中務御前に参り、如何に申さん中務公、某は肥後に於て「赤星源次綱明と申す者なり、三歳以前肥前に於て強敵士隈部左馬之介親興と申せし者のごん言に依り、兄弟の子供をむざんに殺され、其上敵に攻められ、未だ太刀もあがらん次第なり、漸々此處迄参り候なり、何卒肥前方に一度弓を引て給はれ、左もあらば代々の御恩如何でか報すべし」と、頭を地につけ、涙を流して頼み給へば、中務公聞し召し扱は「中々以外の外なる仰かな、當國は矢崎合戦以來赤星殿は大敵、肥前隆信は清和源

氏の末なれば、弓矢に取ては味方なり、其儀無用／＼と御意下る、赤星殿は心も亂れ氣も絶へて、最早力に及ばずと、涙と共に中務御前を下りける「是は扱置茲に又、中務公の御嫡子、又七殿と申せしは、今年十三才にならせ給ふが、赤星の斯くの次第をわれと思し召し、直ぐに中務公の御前にひざまづき、如何に申さん父上様「國主が國主に加勢を頼むは、代にある習ひ、たとひ大敵にもせよ夫れ武士は明日の敵も今日は味方となり、今日ある味方も明日の仇、何卒肥前方に一度弓を引て給はれ、左もあらば此數ならぬ某にも二ツの歳を頂き、十五才と罷成り、御馬の先きに罷出鳥原にて功名致さんと、勇み進んでの

たまへば、中務公なかつかさこう聞し召し、又七殿の心こころを感じ、其儀ならば早く赤星を呼び返せとのたまへば、又七殿は大きに悦よろこび、直ぐに御前を罷立ち奉る。門外もんぐわいに立ち出で、赤星を呼び返し給ふ、赤星殿は斜ななめに悦よろこび、又も中務御前なかつかさんに参りける。中務御掟なかつかじやうに如何に申さん赤星殿、當國とても島津義久が圍みの地なれば、治定返事ちじやうへんじは致されぬ、左れど又、義久に御意ごいを伺ひ、兎にも角にも弓引かでは叶ふまじとのたまへば、赤星殿は斜ななめに悦よろこび、三重さがりて三度の拜はいをなし、頓やがて旅の假屋かりやに歸りける「夫それより中務公は佐土原小路さつちげに島原よせと觸ふれさせ給へば、我もくと進兵中務御手なかつかてに七百騎、又七殿御手なかつかてに三百騎、都合つがよ一千餘騎

にて早佐土原を御立ごたちなされ、何事も勝目の坂を打越うちこへて、去川さりのかはを死出の山やま三途の大川と打渡り、最早庄内三俣日みつまたは高城を打ち過ぎて、都みやこの一城しやうに一夜の宿陣しゆくちんり召されける。直ぐに其の夜は北郷一雲殿へ御内談ごないだんめ召されしが、一雲心得いんくわいたりと云ふ儘に直ぐに都の城中へ島原攻めと觸ふければ、我もくと未だ時刻じこくも移らん其暇そのひまに、五百余騎は只やみくと馳はせ集り、早夜も明けしかば、都の城を御立ごたちちなされ、最早本佐土原三重町みつちやう過れば元服の波を軽く召され、平羽瀬ひらはせすぐれば夜は深更しんかうの峯を打越へ、糸原いとはらをも打通り、心安くも通り山、駒は立たねどまきの原はら、急いそがせ給へば福山の宮が浦みやうらにぞ着かせ給ふ、夫それより中務公は浦々の兵

船貳十余艘を御催し、宮が浦より夜船に召さる、先一番に弓手に見へ
しは櫻島、妻手に見へしは源氏の氏神正八幡を伏し拜み、加治木の里
を詠むれば、音に名高きじや王嶽、嵐に花の數散りて、流れて出る黒
川や、心は帖佐の小松原、心岳寺をも伏し拜み、君に大崎龍が水、御
船の明神伏し拜み、暫しは此處に浮かり船、裏吹く風に帆を揚げて、
今朝の嵐に早鹿兒島の、春日の里にぞ着かせ給ふ、直ぐに五社御參詣、
思ひくりに祈願の程は限りなし、みどりは風に靡き、柳の町をも打過
ぎて、浮世を廻る車町、夫より中務公は御屋形に参り、義久公に御對
顔なされ、赤星が斯くの次第を御申しあれば、義久公聞し召し、其儀

ならば弓引かでは叶ふまじ、軍は勢の多少に依らず、時の大將の運に
依るべし、此度の戦は中務父子と御意下る、暫し御内談召されしが、
夫より直ぐに「鹿兒島小路」に鳥原よせと觸れさせ給へば、我も々
々と進む兵、其名記るすに先つ一番に御一門に取ては島津中務御父子、
御同苗圖書の頭忠長島津左衛門の尉種、島大膳の太夫、其外士大將に
取ては先一番に新納武藏の守忠元上原長門の守川上三河の守、喜入攝
津の守忠政、樺山權左衛門の尉久高入來の院又た六重時阿多長壽院盛
淳山田正巖押川強兵衛、鎌田寛政伊集院久治宮星野村弟子丸梅北某伊
勢彌九郎貞正」中にも河田駿河の守川上左京久堅稻留左京猿渡右京、

出水方に取ては先一番に島津義虎公を初とし御同苗伯耆守町出田羽の
 守平田和洲村田狩之介等を先きとして御一門外に士大將廿余人、惣勢
 壹万三千余騎にて、早鹿兒島を御立なされ、鶴丸山を跡に見て、音に名
 高き水上坂を軽く召され、腰は掛ねど横井町、間だ遙の五本松、君の心
 清淵涼み松、伊集院六郎坂を軽く召され、弓はなけれど矢立原、城は
 なけれど城の町、急がせ給へば程もなく、市來の港に着かせ給ふ、市
 來の港に一夜の宿陣召れける、大隅薩摩遠國なれば、肥前に合する旗
 廿四本と聞へける、夜も明けしかば市來の港を御立なされ、佛の前で
 はわらねども、佛生橋をも打渡り、二度と歸らん薩摩山、死出の山ぞ

と打越へて、敵に向田川内川を三途の大川も打渡り、直ぐに新田八幡
 へ御參詣なされ、中務公御祈願に、南無や八幡大菩薩、此度貪欲無道
 の隆信を、何卒打たせ給へかすと、深く御祈願召されつゝ、頓て川内
 を御立なされ、西方阿久根をかけ通り、高城の小路を打すぎて、急が
 せ給へば程もなく、出水米の津に着せ給ふ、義虎公の旗揃へ、米の津
 にて三日がほど、軍評定取りくくなり、茲に川上三河の守、上原長
 門の守、彼の人々は薩摩に於て、兼て物に馴れたる屈竟の兵なれば、
 天草島へ打渡り、天草殿へ此由かくと告げければ、天草殿は心得たり
 と云ふ儘に、直ぐに足輕雜兵五百余騎をすぐり出し、薩摩方へ加勢と

して渡さるゝ、頓て此由中務公へかくと申上れば、中務公は斜に御悦
び、直ぐに御馬は徳の口へ廻さる、夫より浦々の兵船三百余艘を御催
し、矢筈が嶽より吹きおろす、嵐と共に舟押し出す、名所舊跡浦々詠
めて「面白や先一番に夕生きて、今朝早あらはれ出し者はわらび島、
瀬崎笠山三日月山を後に見て、時に渡せば今浦本浦唐木崎、笛と太鼓
はなけれども、神樂崎をも打すぎて、敵の爲にはししの島、味方の爲
には命長島。今日の日も早吳羽鳥、一夜の宿を輕島、敵に向へば荒江
崎、夜はほのく〜とあこら島、朝日に向ふ日の島や、寝亂れ髪のかつ
ら崎、君はなけれど御所の浦、おしは住まねど池の浦、名残り惜し

さの姫の浦、風に柳の瀬戸を打すぎて、五月中ばの麥の浦、三角の瀬
戸を打すぎて、今朝の嵐に早島原の高濱へぞ着かせ給ふ、すぐに島原
の安徳寺に御陣召されしが、夫より中務公は軍の手分召されける、先
一番に稻留左京、猿渡右京五百余騎にて島原口のかためなり、島津主
衛門の尉を初め、新納武藏の守、種子島大膳の太夫、彼の方々は三千
五百余騎にて野首の陣に籠り玉ふ、島津義虎公を初めとし、御同名伯耆
の守、町田出羽の守、彼の方々貳千余騎にてからめ手口のかためな
り、伊勢彌九郎貞正、河田駿河の守、川上左京久堅、彼の人々は一千
五百余騎にて桑原の陣に籠りける、島津中務御父子、川上三河の守、

上原長門の守、彼の方々は残りの勢を引き具して總陣へ籠り玉ふ、足
 輕雜兵五百余騎を勝り出し、之れは後先陣の御手當なり、頓て此由肥
 前方へ使者を遣はさる、使者は案内乞ふて内へ入り、頓て隆信殿へ此
 由斯くと告げければ、隆信殿はからくと打笑ひ、愚人夏の虫飛んで
 火に入る風情かな、音に聞く島津兄弟を此度我手を以て安々と打亡
 ぼし、三ヶ國を我が手に入れ、我九州九ヶ國の主となりて、子孫永く
 榮花に榮へんと「勇み進んで勢揃へ六ヶ國へ島原よせを觸させ給へば
 我もくと進む兵先一番に鍋島加賀の守直重、田尻副島隈部左馬之介
 親興、はくし刑部和田民部伊奈常陸守同苗縫之丞野中大膳吉弘嘉兵衛

之尉宗晴小川武藏の守寺山陸奥之守を初として士大將九十余人、惣勢
 六万八千余騎にて、龍造寺隆信を惣大將として、九十三本の旗を靡か
 せて、吉日あらばれ肥前の城下を御立なされ、島原へと志す、此人々
 の勢の程は、如何なる勇士も面をそばめ、中々恐れんものこそなかり
 ける。

同 (三段)

去程に肥前軍衆は、薩摩方を一目見て、案にも違はん小勢かな、いら
 高珠數ではあらねども、手の内にもまんと勇む勢、荒鷹が小鳥をね

るふて「勇が如くなり、薩摩軍衆は肥前方を一目見て、此度の戦は薩摩に再び歸るとは皆思ふなよ、猪武者ではなけれども、向ふたる敵は只一筋に切て通れと、諸軍勢に下知をなし、薩摩に二心つかはん其爲に、三百余艘の兵船は、皆島原の高濱に引き上げて、一同に火を掛け天も霞と焼き捨る、薩摩方をよくく物にたとふれば、かどの鳥網代の籠る魚とかや、前は大敵後は大海、左右は岩石そばだちし、洩れて行くべき様は更になし、是は扱置き茲に又、河田駿河の守は薩摩に於て兼て傳へし兵道の達人なれば、清水が谷に下り、夜の間七度の氷をかゝり、天に向て祈り給へば、其夜源氏の氏神正八幡の御夢想に、

此度の戦は肥前は敗軍薩摩の勝軍と神慮にましましては、難有やなと河田殿は大ひに悦び、頓て此由中務公へかくと申し上れば、中務公は不斜御悦び薩摩方の心を勇めん其爲めに、假屋く此由斯くと觸させ給へば、これを勢に稻留左京、猿渡右京五百余騎を引き具して明けの日の卯の刻計りに成りぬれば、濱手に三度の吐氣をドツと揚げ、一ツかいを相圖として、切て出れば肥前方、隈部副島が大勢に御し合はせ、追つ追はれつ受つ流しつ、三度の太刀打、四度の追込、五度の戦、六度の合戦、七八度にはしのぎを削り、つばを割り、切葉の金もみちんになれと、世に烈敷爰を詮度と火花を散して戦ひしが、痛はしや薩摩

方は朝だちの戦に、稻留左京猿渡右京五百余騎は只やみくくと打たれける、未だ惜しかる歳の稻留が卅一、猿渡右京廿八惜しまぬ人こそなかりける「去れど又大敵の隈部親興を打取つたり、是は扱置茲に又、島津主衛門の尉を初とし、新納武藏の守、種子島大膳の大夫、彼の方々は三千余騎にて、野首の陣より切て出れば、肥前方小川武藏の守が大勢に卸し合せ、爰を詮度と世に烈敷戦ひしが、向敵二千余騎はやみくく打たれける、最早是迄なりと云ふ儘に、勝吐氣ドツと揚陣所差して引て行く、「爰に又島津義虎公を初、御同名伯耆の守の方々は、貳千余騎にてからめて口より切て出れば、肥前方寺山陸奥の守が大勢に卸

し合せ、爰を詮度と戦ひしが、薩摩方危く見へけるを、中務公總陣より御覽なされ、斯ては叶ふべからずと、御旗本の勢を一ツになして、肥前方大勢が中へ横入をぞ召されける、追つ追はれつ受け流しつ、西より東北より南、くも手かくなは十文字、八ツ花形と云ふ儘に、爰を詮度と必死になつて戦ひ給へば、痛しや肥前方は小川武藏の守、寺山陸奥の守を初とし屈竟の兵一千余騎は只やみくくと打たれける、其外足輕雜兵共に至る迄、此處彼處の谷のつまりくく切て落さるゝものこそ數知れず、茲に又川上左京久堅は戦ひ今を花と見て、直ぐに我手斗を引き具して、桑原の陣より切て出、肥前方寺山が死したる旗をうばひ

取り、肥前軍衆に様を替へ、陣屋くをあなたとかけ廻りしが、鍋島加賀の守直重にハタト行逢へり、如何に申さん鍋島殿、某は士の体もなし、只今島津方横入の業に目がくれて、君隆信公の御本陣をハタト見失なへり、何卒教へ給れ鍋島殿とありければ、鍋島も勢を見れば薩摩勢、旗印を見れば肥前方、暫しが程はあされ果て居たりしが、肥前方も運や盡さるらん、大荒敵を味方の勢と心得て、我君隆信公はあなたに見へし温泉の小松原に御側卅六騎を召れ、床机に腰を掛け、母衣掛武者にておわします急き参られよと教へける、川上殿は斜に悦び、鍋島が教の通り温泉の小松原に攻め登り見れば、案に違はず隆信

は御側卅六騎を召れ、「母衣掛武者にておわします、最早手の内と心得て、直ぐに其日の装束をハタトあらため、頓て大音揚げて呼はる様、如何に申さん隆信殿、某を如何なる者とや思ふらん、薩摩に於て島津義久が郎等に、川上左京久堅とは某なり、此度赤星兄弟の子供のうらみの太刀を受けて見給へと、云ふより早く切て掛れば、隆信御掟に、如何に川上は薩摩に於てゆゑある武士が武士。ゆゑなき武士なる日下に廻れとありければ、川上殿はカラくと打笑ひ、士が士を打つに日下日表の差別あるましと云ふ儘に、三尺六寸の大太刀を抜き持て、隆信の弓手に廻り首を水もたらさず打落す、御側卅六騎は此由見るより

主を討たせて叶ふまじと、切て掛れば川上殿は隆信を討たる勢に、爰を詮度と戦ひ給へば、痛しや三十六騎も只一ツ枕に討たれける、仕すましたりと云ふ儘に、勝吐氣ドツと揚げ、隆信の首を太刀の切先さに貫ぬきて本丸の陣を心静かに引て行く、頓て小松原にも成ぬれば鍋島副島彼の兩大將の者共は、此由一目見て以の外に打驚き。扱は中々薩摩軍衆が何時の間に奥の陣に洩れたかな、主は討たれる我君の敵、何國迄も逃すまじと云ふ儘に、切て掛れば川上殿は大音揚げ、向たる敵は只一筋に切て通れと諸軍勢に下知をなし、群がる大勢が中へ面も振らず割て入り、爰を詮度と火花を散して戦ひしが、痛しや肥前方向ふ

敵五百余騎は討たれける、最早是迄なりと云ふ儘に、勝吐氣ドツと揚げ陣所差して引て行く、頓て中務公へ此由かくと申上れば、家久公斜に御悦び、薩摩方の心を勇めん其爲に小高き所へ馳せ上り、大音揚げて『肥前方龍造寺山城の守隆信を川上左京久堅が討ち取つたりと、勝吐氣をドツと揚げ給へば、此れを勢に三ヶ國の勢を一ツになして落る肥前の大勢にかけ合せ、追つまくりつ攻めければ、痛しや肥前方は秋田の水ではあらねども、つまりくに切て落さる者こそ數知れず、是は扱置茲に又、中務公は又七殿を御前に召され、如何に又七唐土の虎は一日に千里をかけてかけ戻る、一身を捨て一毛をおしむ、夫れ武士

は幼き時より武藝を勵み、名を末代に残しおく、人は一代名は末代、必ず未練致すな、未練致して苗字の恥辱家の恥、汝島津の家に生れ來て此度の戦に肥前方名ある兵討取り、我に見せばやとのたまへば又七殿かしまり、頓て御前を下りける「かゝる處に肥前方鍋島加賀の守が落行く處を目に掛け給ひ、駒引寄せ打乗り、頓て大音揚げて呼ばる様、其許に落ちさせ給ふは肥前の大將鍋島殿と見へにける、何國迄落ちさせ給ふぞのがすまじと云ふ儘に、駒を飛して追かけ給へば、鍋島の落行駒の手綱を引き止め、暫し思ふ様主は討たれる手勢はなし、最早方に及ばすと、駒より飛下り弓の本つる切りはなし、隆參するぞ哀

なり、又七殿御掟に、如何に申さん鍋島殿、此度の戦は赤星が兄弟の子供の敵戦の事なれば國取る迄は及ぶまじ、左あらば肥前の城は御邊に預け置くとの御掟なり、鍋島殿は斜に悦び、三重下りて三度の拜をなし、頓て肥前を差して落ちにける、去れば中務公は此度の首つもりを召されしが、肥前方には壹万八千余騎と聞へける、薩摩方には上下共に八百余人扱も打死す、頓て隆信の首を赤星殿へ賜はりければ、押頂き薩摩方を軍神摩利支天とぞ伏し拜む、其後八代御前に賜はりければ女心のはかなさに、此首を見れば兄弟の子供の事が彌増さるとして、烏丸の足駄にてけり上げり下げ七度目にかさめ置く、川上薩摩は此由一

目見て以の外に腹を立、士が太刀の先にて取たる首を、女の手足に掛
けては如何せん、中務御掟如何に川上古より女童と云ふことあるが誠
なりと、漸々川上殿の心をなだめ給ふ、其歳の年號申せば、天正十二
年、頃は五月廿四日なり、其日の支干は源氏の氏神正八幡の御縁日、
「世の中は何と聞ても唱へても、浮は世の中つらさは隆信、義理は薩摩
方、物の哀れを留めしは、赤星の兄弟の子供にて、諸事の哀れをと
めたり。」

* * * * *

五 條 橋

小 林 篤 里

誰が吹む笛の音調歎いと啣院と、「月を碎くる小波の、琴々なから水音
に、和して冴へたり五條橋畔。太鼓の胴や橋板を、とゞろくと踏み
ならし、さても一人の荒法師、「夜叉もおそれん粉粧は、脊上に怪器を
擔ひつゝ、小腋に薙刀かひ込んで、人やきたれと睨みける。」それとは
何んのしら綾の、被衣に身をば優すがた、ゆらりくと寄り添ふて、
怖れもやらず來りしは、ところ鞍馬に近ければ、天狗の業か魔か怪性
歎、「要こそあれやと長刀を、月に砥いでぞ一とゆすり、あふり翳して

薙ぎたつる。被衣ぬぎ捨て小冠者は、稚兒鬘を風に亂しつゝ、一上一下と飛び沈み、右往左往に接闘ひぬ、侮りがたき敵勢に、いらだちすくふを欄干の、擬寶珠に閃りと飛上り、「鐵扇をひらいてさし招ぐ、武勇に感じ荒法師、こゝに名乗りつ義を結ぶ。」
「つるぎ枕に鎗ぶすま、片しく暇もつさそひて、秋の木ノ葉と平氏をば、一舉みじん追討し、「鎌倉山に月照らし、しばし憩ふる腰越に、眺めもさらぬ主従が、夕べの雲のつれなきに、未だ着も馴れぬ袈裟衣「名に負ふ宅安の新關へ、ついに泣かぬ辨慶が、一期の泪をこぼすなる、わはれは此處にぞ忍びける。」

折しも鐘の音鎗々と、夜蔭を破つて、乾坤にひいき波れば兩人は、「再會期してたち別れ、またも横笛ふきならす。「隙もる風に夢やぶれ、通ふ枕に聴くものは、しばし音調の絶えたるを、月ながめしとやおもひなむ。」

櫻樹の詩

麻を亂せる如き世に、四方の草木もおのかじ、靡き背きて定めなく、「矢尻を磨き矛をとぎ、兄弟鏢をけづりつゝ、父子は首を争ふて、矢さ

笠置山

嗚呼忠臣と世の人の。仰ぎたふとむ橋の。花の香りの古へも。忍ぶに
 今はいと遠き。後醍醐帝の大御代は。武門の旅や五月蠅なし。『螢火な
 せど世を照らす。光りも持すなかくに。人の心を亂しつゝ、すめら御
 國に定れる大義名分うちわすれ。ほしいまゝなる振舞に、朝權いよい
 よかとろへて、天津日嗣の御光りは。遮ざる雲にへだてられ。射照と
 はらず成にしを。帝は武く雄々敷も。斯かる雲霧打はらひ。世を平に
 安らけき。古へ振に返へさんと。御心碎きたまひしも。流れ久しき悪

弊の封建制度に馴し徒は。上を輕しめないがしら。下を苦しめいたは
 らず。世は蒺藜と亂れつゝ。麻とをつるゝ時なれば。濱の眞砂の數多
 き。臣の中にもいさぎよく。命さへげて君のため。屍さらさん者もな
 く。身を打すてゝ國の爲め。力をつくす者とは。絶てなかりしその
 時に。河内の國に其の名さへ。高くそびえし金剛山其麓なる村さとの、
 蓬茂れる草の家。かくれ住ける忠臣の。あるよし遙か雲井まで。聞
 へ渡ればかしくも。召出せよとみことのり。下るまに。くゆくりな
 く。笠置の山に岩かねの。こごしき道を分のぼり。心の駒に鞭あてゝ。
 進みまうでしその人は諸兄の王の子孫にて。名を正成と名のりつゝ。

「巖いわはとかたき楠木くすのぎを。家の名となし心をも。堅かたくかためし大丈夫まじらの。御代安かれと祈いのりつゝ。いざ事ことあれば家も身も。君きみにさしげて一筋ひとすぢに。臣おみたる道を盡つくさんとかねて思おもへば今更いまさらに。我身わがみにあまる面目めんめくと。よろこび勇いさみ百ひゃくしきの。宮居みやゐにまうで跪ひざまづき。ひたとひれふし謹みこみて。勅命みことをぞ待まちにける。「やがて帝みかどは藤原ふじふらの。藤房卿ふじふらきやうを召よたまひ。叡慮えいりよの程ほどを細々のたまはと宣のたまへ給たまひて正成せいせいに。此こを傳つたへと仰おほせらる。藤房卿ふじふらきやうはかしこみて。御前ごぜんしりぞき出いで來きたり。かたちをたゞし嚴重おそろに。やよや正成せいせい能よく聞きけと。汝なも兼かて知しる如ごとく。御鳥羽院ごとばゐんの御宇ごうよりは天下てんか大だいに亂かれ果はて。鎌倉かまくらいよいよ増長ぞうちやうの。稜威みづゑおとろへ行いまゝに。御政事ごまつりごとはつゆばかり。叡慮えいりよ

のまゝにならずして。天下てんかあれ共ともなき如ごとく。其それのみならず三帝さんていを。遠とほき島根しまねにうつしは、皆義時みなよときのなすわざぞ。其子孫しそんたる高時たかときが今いまた君きみにさからひて。恐おそれ多くも玉體ぎよくたいを。困苦こんくに沈しづめまつるこそ。惡にくみても猶なほにくむべき。鎌倉方かまくらかたの仕業しわざなれ。斯ごとかる困苦こんくに在ますも。御身ごみをいとひ玉たまはずに。下萬民しもばんみんを救すくはんと。且暮宸襟あけくれしんきん痛いためられ。如何いかにもなして虐臣ぎやくしんを。誅ちゆうせんもの一向ひたすらに。御心ごこころくだきたまへども。是これも叡慮えいりよに任まかさねば。今いまに詮術せんすべなきまゝに。汝なんぢをこゝに召よ出し。賊ぞくを滅めし大御代おほみよを。昔むかしに返かへす術すべあらば。聞きし召よさんと仰おほせらる。つゝむ事ことなく速すみに勅答ちよくたうあれと言葉ことばさへ。「最もとさはやかに傳つたへらる。』正成せいせいおそれかしこみ

て。是はありがたき勅語。賤しき身には候へど。皇國に生し民なれば。
 我大君のみためには。身をば思はで盡すこそ。臣たるもの道なれと。
 兼て思へば身はたとへ。山に倒れて草むすも。海に沈みて屍をば。水
 屑となすも君のため。など惜むべき我生命。備戦ひは兵よりも計りご
 とこそかなめなれ。強きを以ていふならば。我六十州の兵あるも。武
 藏相模の二州には、いかで勝べき様やある。去れば今度の戦ひも我計
 略をめぐらして。彼をはからば如何程の。大敵とても恐れんや。然は
 われども勝敗は。常なきものに候へば。よしや一時は敗るともかりそ
 め事に御心を、挫かせ玉ふことなかれ。正成此世にゐるうちは。必ず

賊を討ち定め御心安めまつらんと。勅答すれば帝にも。いたく喜びま
 しくて。只何事も正成の。心に任せ置くべしと。厚き御言葉給はれ
 ば。嬉しさ胸に溢れつ。手の舞ひ足のふみどさへ。知らで喜ぶ眞心は。
 色に見へつ。大丈夫の。誓ふ言葉によどみなく。流れて清くいさぎよ
 し、やがで正成いとまをひ。身ふるまひを古郷ふるさとに引返し。心の色の赤坂あかさかに。城
 を築きずきて事あらば、こゝに御輦みぐるま迎へんと、心のうちにはかりつ。笠
 置さきを辭して歸りしは、元弘元年八月の、半も過ぎて明方あけがたの、空に薄雲
 残れるは、ものいふの身の寶たからなる、弓張月ゆみはりづきと知られけり。

* * * * *

古今和歌集序

大和歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける、世の中にある人、事業繁き者なれば、心に思ふ事を見る物聞く物に付て言ひ出だせるなり、花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生とし活ける物何れか歌を讀まざりける、力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神を哀れと思はせ、男女の中を和らげ、猛き武夫の心をも慰むるは歌なり、此歌天地の開け始まりける時より出で來にけり、然あれども世に傳ふる事は久方の天にしては下照姫に始まり、荒ら金の土にて

は素盞鳴尊よりぞ起りける、千早振神代には歌の文字も定まらず、すなはにして事の心分さがたかりけらし、人の世となりて素盞鳴尊よりぞ三十文字餘り一文字は詠みける、斯くてぞ花を愛で、鳥を羨み、霞を憐み露を悲しむ心、言葉多く様々になりける、遠き所も出で立つ足許より始まりて年月を渡り、高かさ山も麓の塵ひちより成りて天雲棚引く迄かひ登れる如くに、此歌も此の如くなるべし、難波津の歌は帝の御始めなり、淺香山の言の葉は采女の戯れより詠みて、此二歌の父母の様にてぞ手習ふ人の始めに物しける、抑歌の様六つあり、唐の歌にも斯くぞ有るべき、其六種の一つには添へ歌、大鷦鷯の帝を稱え

奉れる歌

難波津に咲くや此花冬籠り今や春へと咲くや此花

といへるなるべし、二つには

咲く花に思ひつく身のわぢさなき身に病着の入るも知らずて

といへるなるべし、三つにはなぞらへ歌

君にけさ朝の霜の置きていなば戀しき毎に消えや渡らむ

といへるなるべし、四つにはたとへ歌

我が戀は詠むとも盡さし荒磯海の濱の眞砂の詠み盡すとも

といへるなるべし、五つにはたとへこと歌

偽りのなき世なりせばいか許り人の言の葉嬉しからまし

といへるなるべし、六つにはいはひ歌

此殿はうべも富みけりささくさの三つは四つばに殿造りせり

といへるなるべし、今の世の中、色につき人の心花になりけるより

仇なる歌果敢なき事のみ出て來れば、色好みの家に埋れ木の人の知れぬ

事となりて、まめなる所には花薄穂に出すべき事にもあらずなりにけ

り、其の始を思へば斯かるべくなむあらぬ、古のよの帝、春の花の

朝、秋の月の夜毎に待らふ人々を召して、事につけて歌を奉らしめ給

ふ、或は花をこふとてたよりなき所にまとい、或は月を思ふとて知る

へなき闇に迎れる心を見給ひて賢し愚なりと知ろし召しけむ、然ある
 のみにあらず、礫石にたとへ築波山にかけて君を願ひ、悦び身に過ぎ
 樂み心にあまり、富士の煙りによそへて人を戀ひ、松虫の音に友を恐
 び、高砂住の江の松も相すひの様にて、男山の昔を思ひ出で、をみ
 なへしの一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける、又春の朝に花の
 散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年毎に鏡の影に
 見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て我が身を驚き、あるは
 昨日は榮え奢て時を失ひ、よにはび親しかりしも疎くなり、あるは松
 山の波をかけ野中の水を汲み、秋萩の下葉を詠め、曉の鳴の羽がさを

歎え、或るは吳竹の浮き節を人に言ひ、吉野川を引きて世の中を恨み
 來るに、今は富士の山も煙り立たずなり、長柄の橋も造るなど聞く
 人は歌のみぞ心を慰めける、いにしへより斯く傳はる中にも、奈良の
 御時よりぞ廣まりにける、彼の御代や歌の心を知ろし召しけむ、彼の
 御時に正三位柿の本の人麿なん、歌の聖のありける、是は君も人も身
 をあはせたりといふなるべし、秋の夕龍田川に流る、紅葉をば、帝の
 御目に錦と見給ひ、春の朝吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみな
 ん覺えける、又山邊の赤人といふ人ありけり、歌にわやしく妙なりけ
 り、人麿は赤人の上に立たむこと難く、赤人は人麿が下に立たむこ

と難くなん有りける、此人々を置きて又秀れたる人も吳竹のよゝに聞え、片糸のよりくゝに絶えずそ有りける、之より先きの歌を集めてなむ萬葉集と名付けられたりける、彼の御時よりこのかた、年は百年餘り世は十代になむなりける、爰に古の年をも歌の心をも知れる人詠む人多からず、僅に一人二人なりき、然かはあれど是彼得たる所得ぬ所互になむある、今此事をいふに官、位、高き人をばたやすき様なれば入れず、其外に近き代に其名聞えたる人は、乃ち僧正遍昭は歌の様は得たれ共眞少し、譬へば繪に書ける女を見て徒らに心を動かすが如し、在原の業平は情餘りて言葉たらず、萎める花の色なくて匂ひ残れ

るが如し、文屋の康秀は詞巧にして其極身におはず、いは、商人の美衣着たるが如し、宇治山の僧喜撰は言葉幽かにして始終り慥ならず、言は、秋の月を見るに曉の雲に過くるが如し、詠める歌多く聞えねば彼之を通はして能くしらず、小野の小町は古の衣通姫の流なり、憐なる様にて強からず、いは、よき女の惱める所あるに似たり、強からぬは女の歌なればなるべし、大友の黒主は其様賤し、言は、薪負へる山人の花の影に休めるが如し、此外の人々其名聞ゆる野邊に生ふる葛のはひ廣どり、林に繁げき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて其様知らぬなるべし、斯かるに今皇國の天の下知ろし召すこと四つのと

き九のかへりになむなりぬる、普き御いつくしみの浪八島の外迄流れ、
 廣き御惠みの影筑波山の麓よりも繁くおはしまして、萬の政を聞召す
 暇、諸々の事を捨給はぬ餘りに古の事をも忘れじ、ふりにし事をも起
 し給ふとて今も見そなはし後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八
 日に大内紀友則、御書の所の預り紀貫之先きのかひのさう官凡河内の
 躬恒、右衛門の府生壬生の忠岑に仰せられて萬葉集にいらぬ古き歌自
 らのを奉らしめ給ひてなん、其れが中にも梅をかさすより始めて、
 郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、又鶴龜に付けて君を
 思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を戀ひ、逢坂山に至りて手向を

祈り、或は春夏秋冬に入らぬ種々の歌をなん撰ばせ給ひける、凡てち
 うたはたまきづけて古今和歌集といふ、斯く此度集め撰はれて山下水
 の絶えず、濱の真砂の數積りぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨みも聞
 えず、礫石の巖となる悦のみぞあるべき、夫れ枕詞は春の花匂ひ少く
 して空しき名のみ、秋の夜の長さを啣つれば且は人の耳におそり、且
 は歌の心には思へど棚引く雲のたちる、鳴く鹿の起き伏しは貫之等此
 世に同じく生れて此事の時に逢へるなん悦びぬる、人磨くなれにた
 れど歌の事といまれるかな、たとひ時移り事さり、樂しび悲しび往き
 かふとも、此の歌の文字あるをや、青柳の糸たえず松の葉の散り失せ

すして、まささの葛長く傳はり、鳥の跡久しく留まれば歌の様をも知
り、事の心を待たらむ人は大空の月を見る如くに古を仰ぎ今を戀ひさ
らめかむ。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

那須與市

四國八島の荒磯の濱で、源氏平家の戦に、源氏方弓矢の擧れ、今が世
までも記さるゝ、「左もあれば平家方より沖なる船に、扇を的に立てけ
れば、義經公御覽候らひて、數多の方を御前に召され、如何に方々あ

れを見よ、平家方より沖なる船に、扇を的に立てければ、兎にも角に
も彼の的、射らでは叶ふまじと宣へど。沖に立たるの的なれば、誰こそ
御受致す者はなし、爰に下野の國の住人、那須の與市宗高は、名を得
たる弓取なれば義經公宗高を御前に召され。如何に與市あの扇を射よ
と宣へば、與市承り再三辭退申上げれば、義經公怒つて申さる様、此
度鎌倉を出立て、西國へ向はんずる人々は、皆義經が下知を背く可ら
ず、この仔細を存せぬ者は、たゞちに鎌倉へ歸るべしと宣へば、與市
今は辭するに言葉なく御請いたして御前を下りける「宗高此年十九歳、
常に勝れて華やかに、緋威しの鎧着て、鍬形打たる五枚甲の緒をしめ、

白檀磨きの脛當に、兵庫鎖のこてをさし、年は五歳の眞黒毛の名馬、
 梨地の鞍に、紫手綱。重藤の弓を持ち、廿四差したる切負の征矢を負
 ひ。其身輕げに乗りたる形勢は、さも勇々敷ぞ見へにける。一頓て浪打
 つ際に乗出し、沖なる船を見渡せば、間二町計りと打見えて、名殘の
 浪は音高く。風は競ふて浪は小車の如くなり、的は定らず射るに射ら
 れぬ次第かな、されど又武士の、御請致せし上からは、兎にも角にも
 射らでは叶ふまじと、直に小松原に駈け揚り、駒より飛び下りて那須
 八幡を伏し拜み、「某が七十五迄の命ならば、六十五迄、六十五迄の命
 ならば、五十五迄、五十五迄の命ならば、四十五迄に身命を締め、沖

なる的を射らせ給へと、深く祈願を申ける、やがて那須八幡聞召し、
 二つともなき命に引き替へて、祈る心の不憫ぞと、されは拾二方を的
 一筋に、打守れよとの御宣託ありければ、「宗高駒引寄せ打乗りて、海
 中へ颯と駈け入り、浮きつ沈みつ一町ばかりは乗出せしが、駒逸物と
 は申せども、逆巻波にせかれつゝ、泳ぎ兼てぞ見へにける、矢ころは
 少し遠けれど、弓と矢打交ひ、矢聲をかけて放てるに誤たず、扇の金
 目本よりぶつと射切り「扇は空へ舞ひ上り、海中へさつと落ければ、
 平家舷を叩き、陸には源氏つくばみをならべ、舷を叩ひて悦びける、
 されば平家方敗軍と極まりて「西國指して落ちて行く、宗高其外高名

も數多あれど、かほどの高名は、しじめにて、其名を末代に輝かし、源氏の御代こそ目出度けれ、源氏の御代こそめでたけれ。

菅 公

花盛ならんとすれば、雨風これを散し、月明かならむとすれば、浮雲これを蔽ふとかや、『されば右大臣菅原の道真公は、讃岐守より權でられ、天下の万機を綜裁し、精勵刻苦ひたすらに帝を輔たまひしに、左大臣藤原時平といへるもの、道真公が信任の厚きを妬みうらやみて、

源光、菅根等と共にはかりて道真公はゆゑしき大事を企つると、眞實しやかに讒すれば、帝はこれにまどはせたまひ、俄に公の官位をうばひ、大宰權帥となし、筑紫の國へと謫したまふ、おん痛はしや道真公住ならしたるわが家も今日を限り、椽先に立出たまへば家の兒ら、御袖ひかへて別をば惜む涙にくちやせん、道真公かすかにいつる涙をといめかね、かたへを見れば、日頃より愛せし梅は今をこそ春べとかはる有様に、

東風吹ば香おこせよ梅の花

主なしとて春なわすれそ

と詠たまひつ、終に配所に行きたまふ。

同 (二段)

薨ならべて嚴しく建し宮居に引かへて、風吹すさぶ筑紫瀉、茅の屋根
には雨もりて、名もなき草の椽先に、生茂りたる詫住居、「右大臣の配
所とは誰しらぬ火のもゆるなる思はきゆるひまもなし、一夜月明かに
照わたり、千里の外も隈もなきに、道真椽に立出て懐舊の情やみかた
く、かの月かげは都にて見しまゝなれど、われのみはかくも變りてう
たてくも、月もる檐のこの配所、げにも都のこひしさよ、

霽の間は都のそらにすみぬらむ

心筑紫のありわけの月

實に去年の今夜なりけり朱雀の院の月の夜、帝及び法皇のお召により
て参内し拙き詩一首を上りしに、御感斜ならずして身にあまりたるか
づけもの、その「御衣はあゝなほこゝに有るものを」とて詩一首を賦
したりける

去年今夜侍ニ清凉、
恩賜御衣猶在レ此、

秋思詩篇獨斷腸、
捧持日々拜ニ餘香一

君をおもふの情切なりしかども、「再び世には出ずして、おもはぬ罪に

怨うらみをのみはかなくも配所の露つゆときえたまふ

神かみの御山みやま

白扇倒にかゝる東海とうかいの天とよみけむ、神世かみよながらの富士ふじの峰みね高く聳え
て天を衝つき、空ゆく雲もいゆきはかり、積白雪つじしるゆきの清らかに茜あかねさす日
の影かげうけて、扇の裾すその末すえ廣く、實にや皇國かみくにの要かぎなり、されば萬里まんにの濤なみ
の上、八重やえの潮路しほぢを越來なる、外國とくごく人も仰見あやみて、大和心やまとこころと諸共もろともにはか
に類たぐひもあし曳ひきの山の姿すがたを賞たのへつゝ、歸かへるを忘わするゝ者ものもあり、實にや尊たかき

神山かみやまの、動うごかぬ御代みよに礎いしとたてゝ、國民くんにたみわ朝あそな夕ゆふにながめてそ、高
きを君きみの御惠みづかひにたぐひつ勵はげむ有ある様に、やがて花はな咲く芙蓉ふゆ峯やうほう、香かほは満みる
一天いつてん四海よっかい共に笑わらふや山々の、春はるの姿すがたを祝いづしけり。

俊基としもと東下りあづまくだり

俊基朝臣としもとあそみは七月十一日に、六波羅むつなへ召捕めいとられて、關東せんだいへ送おくられ給たまふ、再
犯赦とがゆるさざるは、法令ほりぎの定さだむる所ところなれば何と陳ちんずるとも赦ゆるされじ、路次ろじ
にて失あひだはるゝか、鎌倉かまくらにて斬きるるゝか、二の間ふたのまをば離はなれじと、思設おもけて

ぞ出られける、落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦
 着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となれば物
 うさに、恩愛の契り浅からぬ、我故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ
 おき、年久しくも住なれし、九重の都をば、今を限りとかへり見て、
 思はぬ旅に出たまふ、心の中ぞあはれなる、憂をばとめぬ逢坂の、關
 の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽なら
 ぬ海に漕れ行く、身を浮船のうさしづみ、駒もとどろと踏みならず、
 勢多の長橋うちわたり、行きかふ人に、あふみ路や、世をうねの野に
 なく田鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたくもる山の、木の下

つゆに袖濡れて、風に露ちる篠原や、笹わくる道を通ゆけば、鏡の山
 はありとても、涙に曇て見えわがす、ものを思へば夜の間にも、老蘇
 の森の小草に、駒を止めてかへり見る、故郷を雲や隔つらむ、番場醒
 ケ井かしは原、不破の關屋は荒はて、猶もるものは秋の雨、いつか我
 身のをはりなる、熱田の八劍伏かがみ、潮干に今やなるみ瀉、傾く月
 に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末は何處ととふたふみ、濱名
 の梅の夕潮に、引人もなき捨小舟、沈み果ぬる身にしあれば、誰かあ
 はれとゆふぐれの、入相なれば今はとて、池田の宿につきたまふ、元
 暦元年の頃とかよ、重衡中將の東夷の爲に囚はれて、此宿に着たまひ

しに、

東路の丹生の小屋のいぶせさに

ふるさといかに戀しかるらむ

と長者の女がよみたりし、その古の哀まで、思残さぬ涙なり、旅館の
燈幽にして鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍河をうち渡り、小
夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に家郷
の天を望みても、むかし西行法師が命なりけりと詠じつゝ、二度越え
しあともまでも美ましくぞ思はれける隙行く駒の足早み、日已に亭午に
昇れば、餉まるらする程とて、輿を庭前に昇おろし、轆を叩きて警固

の武士を近づけ、宿の名を問ひたまふに、菊川と申すなりと答へけれ
ば、承久の合戦の時、院宣書たりし答によりて、光親卿關東へ、召下
されしかば、この宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水、

汲下流而延齡、

今東海道菊河、

宿西岸而終命、

と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今は我身の上になり、哀やいと
まさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞかゝれける、
いにしへもかゝる例をさく河の

同じながれに身をや沈めむ、

大井河を過たまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の
 山の花盛り、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は
 ふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ、島田藤枝にかゝりて、
 岡部の真葛裏枯れて、ものがなしき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、
 蔦楓いと茂りて道もなし、昔業平の中將の住家を求めて、東の方に下
 るとて、夢にも人に逢ぬなりけりと、よみたりしも、かくやと思ひ知
 られたり、清見瀉をすぎたまへば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の
 關守に、いと涙を催され、向はいつこ三保が崎奥津蒲原打ちすぎて、
 富士の高根を見たまへば、雪の中より起つ煙り、上なき思ひに比べつ

ゝ、明る霞に松見えて、浮島が原をすぎ行けば、潮干やあさき船浮き
 て、かりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道ゆ
 きなやむ、足柄山の嶺より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎ
 の急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、
 鎌倉にこそつきたまひけれ。

* * * * *

篠原合戦

嵐にさそふ櫻花、散りて惜まぬ武夫の、心のうちこそ勇ましけれ、さ

ても此度篠原の合戦に、武藏國の住人長井の齊藤別當實盛は、赤地の直垂に、萌黄緘の鎧着て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、金つくりの太刀を佩き、二十四さしたる切符の矢を負ひ、滋藤の弓を持ちて、連錢蘆毛なる駒に、金覆輪の鞍を置きてぞ召されける、已に味方の軍勢は、秋の木の葉のそれならで、落ち行く中に只一騎返せくと攻め給ふ、斯かる所に木曾の方より「手塚の太郎進み出で、あらやさし如何なる人にて渡らせ給ふは、味方の御勢は落ち行き候ふに、只一騎残らせ給ふぞ名乗らせ給へとありければ、先づ斯くいふ御身こそ誰ならん、光盛某は信濃の國の住人、手塚の太郎光盛なり、さてはよき敵に候かし、

されど我れ御身を探るにわらずして、思ふ仔細のあるなれば、わざと名乗りは致さず、されば手塚殿、「いざ寄れ勝負を決せんと、駒の手綱をかひくりて、馳せ並ぶ所に手塚が郎等、主討せじと中にへたゝり、實盛に押し並んでむんづと組む、あつはれおのれは日本一の剛の者と組みて失すよなと、乗りたる鞍の前輪に手塚が郎等を押しつけつ、抜く手も見せず首かき切つて落せは、「手塚の太郎弓手に廻り、草摺をたゝみあげ二刀さす所をむんずと組み、互ひにかはす聲のうち、一度に鎧を踏みはづし、兩馬が間にどつと落ち、上を下へと返しける、痛しや實盛は、心は矢猛にはやれども、軍には己に爲疲れ、其上老武者の

悲しさは、風に枯木の力なく、哀れ義の爲に骸を戦士に晒し、「終に篠原の露と消え給ふ、されば聞く人見る人諸共に、あな勇ましき武夫と、はめたゝへぬはなかりけり、賞めたゝへぬはなかりけり。

同 (二段)

去る程に、手塚の太郎光盛は、木曾の御前に畏り、某異様の武士と引組み、「首討ち取りて参りたり、大將かと思はれはつゝ、勢もなし、又侍かと思へは、錦の直垂を着したり、名乗れ」と攻め候へど、遂に名乗りは候はず、聲は坂東聲にて候ひつると申上ぐれば、木曾殿御覽

候へて、さては齋藤別當實盛か、さあらんには鬢の黒さこそ不思議なれ、樋口の次郎兼光は、年頃馴れ遊びて見知りたれば、樋口呼べよと召されける、樋口次郎只一目見て、あなむざん、齋藤別當實盛にて候ひけると、暫し言葉もなかりけり、それならんには早や七十にも餘り、白髪にこそはなりぬらん、鬢の黒さはいかにと宣ひぬ、樋口の次郎や、ありて涙を抑へ、今其の由を申しあげんと思ひ候ひしに、餘り哀に覺え候ふて、先づ不覺の涙のこぼれ候ひける、實盛常に申し、は、六十に餘りて戦へは、若殿原と争ひて、先をかけんも大人氣なし、さりとては老武者と、人々にあなづられんも口惜しかるべきに、去れば

戦場ののぞみなは、鬚髭を墨に染め我れさきに討死すべきよし、常に
 申し候ひしが、誠に染めて候ひき、御洗はせ御覽候へと申しける、木
 曾殿はさもあらんとて、直ちに洗はさせ御覽するに墨は流れて白髪の、
 「姿とこそはなりにける、實に名を惜む弓取は、誰もかくこそあるべ
 けれ、茲に又實盛が錦の直垂を着たる事、私ならぬ望なり、實盛元は、
 越前の國の者にて候ひしが、近來後領につけられて武藏の長井にこそ
 は居住たり、實盛都を出し時、宗盛公に申すやう「某此度北國へ下り
 候はゞ、定めて討死仕るべし、事のたとへに故郷へ、錦を着て歸ると
 申す事の候へは、老後の思出に、錦の直垂を御免候へと申しける、宗

盛公はやさしうも、申たりけるものかなと、赤地の錦の直垂を、「下
 し賜ふぞ有難き、されは古へ朱買臣は、會稽山に縲へし、今齋藤別當
 は、名を北國の岐に揚ぐとかや、かくれなかりし弓取の、名は末代まで
 も香ばしく、名は末代までも香はしく。

* * * * *

雲 龍

惟任日向守光秀は、安土の城を攻落し左馬助秀俊を殘しおきて、山崎
 にと打出でしが運つくる時や至りけむ、小栗栖村の露と消ゆ、様子を

聞きて秀俊は京師をさして行く道を、かへてさす手は坂本の、城を目的にありければ、時に粟津の松原を、北より進んでありけるが、こゝに計らず羽柴方の先陣と聞えたる堀久太郎秀政が、先手の者に大津みち、小勢なれば口惜しくも、散々にこそ破られぬ、本街道も敵方に、塞がれたれば詮もなし、さらばと計り漣や、滋賀の湖水に駿足を、打入れく泳がする、敵の軍兵白浪の、寄する汀にうちむれて、見よや軍に打まけて氣の狂ひたる左馬助が、水に溺るゝ有様を、笑止とばかり罵しれど、こなたは知るやしら浪を、蹶だつる隙よりあらはるゝは、狩野永徳が白練に、筆をふるひし雲龍の、今しも天に雲をおこし、昇らん

ばかりの名書なり、此陣羽織を吹かくる、湖水の風にひるがへし、二の谷と名づけし冑を頂だき、馬は名に負ふ大鹿毛なり、鏡ふん張り鞭をあげ、手綱をさばさくつゝ、是から崎の一つ松、誰をまつらん死出の旅、難なく岸に上りつゝ、矢立の硯とり出し、「明智左馬助湖水を渡し、馬なり」と記して駒に結びつゝ、坂本城に死したりし、響は高さ琵琶の湖、その名によべる四つの緒にかたりてこゝに傳ふなり。

豊 太 閤

小 林 篤 里

天つ日の、母ふところへ、入るよと驚くまさ夢に、「此きみ長く日のもとの、武勇の光とかいやける、「あゝ勇ましや藤吉が、草履とりたる手のひらに、昨日は大將けふは關白、天が下をばもてあそぶ、「大兵百万海を越え、ひさごの馬標敵はなく、支那朝鮮の山も木も、秀吉の名にをのゝきぬ、「壯心中途にたがへども、豊國廟にくらぶれば、君がせはいく脊を打ちし、頼朝の暮は少さきなり、頼朝の暮は小さきなり。

太田道灌

頃は彌生の末つかた、いなゝく駒に鞍置かせ、士卒引率れ道灌は、「狩野にこそは出でにけり、「勇さむ春駒啼く雲雀、影は何處にをちこちの、たつきも知らぬ原中に。士卒にはぐれ道灌は、一人さまよひ居たりけり、折りしも降り来る春さめに、心急かれて道灌は、駒の手綱を搔い繰りて、一鞭高く彼方なる、賤家を指して進まるゝ、訪ふは嵐か松風か、誰れまつかぜに琴の音ぞ、かよふ調のゆかしさに、駒をとめさせ道灌は、門を叩きて簑一領、借らんとこそは乞にける、何を語らん佐保姫の、一枝の花にもいはせ、露も溢れん山吹を、畏しくもささげつゝ、いとも恥らふ其様に、道灌其意を悟り得ず、訝しながら山吹を、

かざして遂に歸りけり、

孤鞍衝レ雨叩ニ茅茨一
少女不言花不レ語。

少女爲贈花一枝。
英雄心緒亂如レ糸。

城に歸りて道灌は、近侍を招き問はせしに、近侍の答て申様、そは古歌の意をかりて、簑なきを花によそへて、答へしなりと、一首の歌を詠じけり、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだになきぞかなしき

斯く云々と事の由、具に申し上しかば、道灌いと愧らひて、いと是

よりは山狩を、止めて詩歌をば學ばんと、一終には詩歌に秀でたり、されは人々心せよ、己が業にと鞭うちて、學びの道に勵みなば、いかなる業か成らざらん、勉め勵めよ國の爲め、勉め勵めよ國の爲め。

花に風 (田原元尙 追善の歌)

吉 水 經 和

月に村雨花に風、心の儘にならぬこそ、浮世に住める習ひなれ、茲に田原元尙は、幼きより武士の、嗜む道を相勵み、君父の爲に身を碎き、ひまわる時は四の緒に、たへなる妙壽田中の、此人々を師と仰ぎ、花

の下陰月の前、友どち集めかき鳴らす、音も其名も茜さす、我が日の
 本に轟けり、嗚呼天何ぞ無情なる、世にも稀なる武夫を、唯一場の夢
 の間に、常世の人となしにける、間垣に残る卯の花も、降る五月雨に
 打しほれ、遠山寺の鐘の音も、あはれ悲しく聞えけり、これ明治のは
 たちまり七年の、さつさ十二日惜むべし、年は四十八思ひまはせば今
 は早や、三年の夢と過ぎにけり

誰將秘曲起幽魂 空令秋風吹九原

欲把琵琶語當日 奈斯絃上露華繁

と吟ずる如く、恨みは胸に充つれども、歸らぬ者はせんすべなく、み

たまの前にまとゐして、思ひくくに靈魂を、慰めん外はなかりけり、
 此まとゐを初めとし、續きくくに供養をなさむこと、生ながらへる友
 どちらが、浮世に残るつとめなれ、浮世に残るつとめなれ。

千早振

紀 貫 之

千早振、神の御代より吳竹の、世々にも絶えずあまひこの、音は野山
 の春霞、思ひ亂れて五月雨の、空もとゞろに小夜更けて、山郭公鳴く
 毎に、誰も寢覺めて唐錦、龍田の山の紅葉を、見てのみ恐ぶ神無月、

時雨れくして冬の夜の、庭もはだれに降る雪の、猶消え歸り年毎に、時
につけつゝ哀れてふ、事を云ひつゝ君をのみ、千代にと祝ふ世の人の、
思ひ駿河の富士の根の、燃ゆる思ひもあらずして、別かるゝ涙ふち衣、
おれる心もやち草の、言の葉毎に皇國の、をふせ畏みまきくして、中に
盡くすと伊勢の海の、浦の鹽貝拾ひ集め、取れりともすれど玉の緒の、
短き心思ひ敢へず、尙新玉の年を経て、大宮にのみ久方の、晝夜分た
ずつこふとて、歸り見もせぬ我が宿の、恐ぶ草おふる板間あらみ、降
る春雨の洩りやしぬらん。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

一本薄

寐ては夢、覺めては現兎に角に、忘れもやらで如何せん、君の面影と
は早古事なれど、馴れし昔の君ぞ戀しき、何と包めど我が戀は、ひと
本すゝき穂に出で、結びも逢はぬ片原の、よるゝ毎に枕の上は、
涙の雨の晴るゝ間迎は更になし、松虫の聲立て、泣く蟋蟀、人こそ
知らぬ片原の、薄が本を宿として、語らん葛の葉を恨み、露ならぬ花
に心を置き染めて、及ばぬ戀を駿河なる、富士の高根に有らねども、
胸に煙の絶え間なく、我が身の程が思ふ儘に、成る物ならば飛行自在

或時は色に染み、奸慾の思ひ薄からず、又或時は聲を聞き、あひし様
 心はいとふに思ひ初めしか、から衣また肌慣れぬ袖だにも、降らぬ時
 雨に朽ちやせん、只何事も今は早や、因果の廻る小車の、我が悪業に引
 かれ来て、思はぬ君を思ふこそ、六ちんのさやうに迷ふかな、斯くは
 云ひし古歌にも有り、行く水に數かくよりも果敢なきは、思はぬ君を
 思ふなりけりと、連ね置かれし歌人の、心も我れも一つぞと、今身の
 上に知られたり、あはれ高きも賤しきも、物思ふ身は異ならずとは、
 語りて萱草假切振りの一夜だに、添はで歎きの森の風、吹さうち返す
 葛の葉の、恨みても尙戀しきと、君が知らざればあだに過ぐる月日は多

の小鳥の身となりて、君があたりを問はん物とは思へども、思ひし事
 の奈良坂や、春日の里に獨住む、いと、思ひは廣澤の、池の清水に身
 を浮べ、やる方もなき身こそつらけれ。

* * * * *

廻る小車

聞くや如何に、うはの空なる風だにも、松に音する習ひありしに、な
 ど憂き人のすれなかるらん、心なき草だにも、花見の折りを忘れし歎
 くに甲斐は渚なる、蟹の刈る藻に住む虫の、我から身をや碎きつゝ、

けれど、花見て暮す春ぞ少し、然ればにや、大和歌にも讀まれたり、
君ならで誰にか見せん梅の花、色をも香をも知る人ぞしる、人ひと榮
え、花は一と時に移つれば替る世の憂きも、春ならぬ生て又逢ひ見ぬ
事は何時ととも、限り有る世を頼むなり、生れつ電光石火の影の間も、
忘れもやらで明け暮れに。思ひし事はなら坂や、春日の里に獨寐て、
最と、思ひは猿澤の、池の螢に身はあらねども身そのみ焦がす其色を、
常ならずしも何故に、知るべき人が知らざれば、さらくの生れとて諸
佛も深く戒しめ給ふと聞く、彼を見て誠に本來無一物、誠しやかと
解かれたり、しやかとは君と我れ翠帳紅閨に枕を並べ、比翼の語らひ

なす事も、之れ得脱の縁ならん、人は心で世は情、地獄極樂誰に尋ね
ん問はん心ならでは知る佛なし、人間は生死無常を辨へて、情を知る
は佛なり。

花 紅葉

ものゝふは、物のわはれを知ると云ふ、華の都も秋來れば、尙一とし、
はの悲さを、増すや今宵の神無月、秋の葉色の染むごとくに、紅葉も今
は色増して、散るを惜まぬ瀧の川、漕ぎ出で見れば海晏寺、こゝも名

情有爲轉變を觀すれば。花も紅葉も一盛り、況んや人も一盛り。人の
 齡が花に似て。「咲くは遅ふて散りやすく。」散り行く花は根に歸る。花
 は散りても木さへあらば。又來る春は枝にもとりて匂ひ來る。鳥は古
 巢に歸るとは云へど。夫れ人間は死して二度跡に歸らぬ死出の山。如
 何なる人の踏み初めて。行くも歸るも涙川。親の別れに子を列れず。
 又子の別れに親添はず。獨り生れて獨り行くこそ。唯冥土の營みは疑
 ふ心あらずして。常に唱へし念佛も。「是は淨土の寶なり。」去ればにや

蟻 蛾

に合ふ紅葉葉の、錦をわざとひく黄昏に、鐘の音も跡消えて、誰が搔鳴
 らす琵琶の音ぞ、「大弦は嘈々として急雨の如く、小弦は切々として私
 語の如く、昭君馬上に調べ、樂天客舟に聞つるにも、いと増りて通ふ
 も哀れ四つの糸、其撥音にいひしらぬ、深き情をこもらせて、積る怨
 みの數々を、晴らさんとてかかき鳴らす、「琵琶のあるじそ誰ならん、
 月かげ清き武藏野の。聲も淋しき秋風に、撥音のみや残るらん、撥音
 のみや残るらん。」

* * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *

に合ふ紅葉葉の、錦をわざむく黄昏に、鐘の音も跡消えて、誰が搔鳴
らす琵琶の音ぞ、『大弦は噌々として急雨の如く、小弦は切々として私
語の如く、昭君馬上に調べ、樂天客舟に聞つるにも、いと増りて通ふ
も哀れ四つの糸、其撥音にいひしらぬ、深き情をこもらせて、積る怨
みの數々を、晴らさんとてかかき鳴らす、『琵琶のあるじを誰ならん、
月かけ清き武藏野の。聲も淋しき秋風に、撥音のみや残るらん、撥音
のみや残るらん。』

* * * * *

蠶 蛾

情有爲轉變を觀すれば。花も紅葉も一盛り、況んや人も一盛り。人の
齡が花に似て。『咲くは遅ふて散りやすく。』散り行く花は根に歸る。花
は散りても木さへあらば。又來る春は枝にもとりて匂ひ來る。鳥は古
巢に歸るとは云へど。夫れ人間は死して二度跡に歸らぬ死出の山。如
何なる人の蹈み初めて。行くも歸るも涙川。親の別れに子を列れず。
又子の別れに親添はず。獨り生れて獨り行くこそ。唯冥土の營みは疑
ふ心あらずして。常に唱へし念佛も。『是は淨土の寶なり。』去ればにや

來す百千度、呼たてられてしづくに、こなたの船にうつり來ぬ、琵琶
を抱きてまばゆけに面を掩ひ彈そめし、その撥音にいひしらぬ、深き情
のこもりつゝ、ひき行くまゝにつねづの、己が心の憂れたさを、訴へ
出る心地せり、人こそ知らぬ濱ゆふの、百重かさなる憂おもひ、積る怨
の數々を、四筋の糸にいはずらむ、軽く打ち緩くひねり、はらひつか
げつ初めには、霓裳をかなで後には六公を彈じけり、大弦は嘈々として
村雨の如く、小弦は切々として私語ごとくに似たり、切々と嘈々ときき
ませて彈ば、大珠小珠玉盤に落つ、間關たる鶯の聲、花陰に滑かに幽
咽たる泉流水早瀬を下る水泉冷澁の趣凝りて、絲を絶え、しばし聲な

きその程は、そらるに憂を催して、聲あるよりも中々に、風情を添え
し折しもあれ、再び響く撥の音、銀瓶碎けて水迸しり、軍起りて打物
の、刀稜を削るに宛も似たり、曲も今はとなりし時、撥を収めて四つ
の緒を、只一聲にかきなせば、さながら絹を裂ごとし、東の船も西な
るも、たゞ悄然と聞惚れて、物いふ人もあらばこそ、秋の浦風身にし
みて、水底白く澄み渡る、月の影にぞ更にけれ、衣をつくるひ居なほ
りて、語る詞も口籠りて、妾はも素は都なる、蝦蟇の陵下の産れにて、
十三歳の頃よりも、琵琶の上手と世に知られ、玉を飾れる宮の内、黄金
をしける臺にも、召のぼせられ遊士の、かなた此方の會にも、招き寄ら

爰に一つの假令あり。蟻蛾と云ふ蟲は如何なれば己が姿になき蟲を、
其れを我巢に集めつゝ。心を盡して祈りせば。我に似る事あるぞかし。
我等如き迷の身も。斯程に深く祈りなば。などか兆のなかるらん。ゆ
いしんの淨土。こんしんの彌陀と聞く時は。十萬億土の極樂も。爰を
去ること遠からず。皆人は彼の理を知らずして。明暮罪を作るぞ果敢
なけれ。罪は來世の火の車。善は淨土の蓮なり。偶々此世に人間衆生
と生れ來て。後生前生を願はずば。いつの世にかは浮ぶべき。

* * * * *

潯陽江

高 崎 正 風

紅葉うつろひ、あしか散る、秋のおはれのいと深き、潯陽江の夕まぐ
れ、友の舟出を送り來て、別れを惜む盃の、數重なれど絲竹の、しらべ
も添はぬ淋しさに、本意なき事思ひつゝ、影遠白き波の上の、月打まも
る折しもわれ、忽ち聞ゆる琵琶の音、おもひもかけぬ事なれば互に心
とさめきて、歸らん事も行く事も、忘れ果つゝその音を、尋ねて誰ぞ
と音なへば、打ひそまりて答なし、舟漕ぎ寄せて酒をそへ、燈火かゝ
げまた更に、宴のむしろを打開き、琵琶のあるじを招けども、頓には出

さその程は、そいろに憂を催して、聲あるよりも中々に、風情を添え
 し折しもあれ、再び響く撥の音、銀瓶碎けて水迸しり、軍起りて打物
 の、刀稜を削るに宛も似たり、曲も今はとなりし時、撥を収めて四つ
 の緒を、只一聲にかきなせば、さながら絹を裂ごとし、東の船も西な
 るも、たい悄然と聞惚れて、物いふ人もあらばこそ、秋の浦風身にし
 みて、水底白く澄み渡る、月の影にぞ更にけれ、衣をつくるひ居なほ
 りて、語る詞も口籠りて、妾はも素は都なる、蝦蟇の陵下の産れにて、
 十三歳の頃よりも、琵琶の上手と世に知られ、玉を飾れる宮の内、黄金
 をしける臺にも、召のぼせられ遊士の、かなた此方の會にも、招き寄ら

來す百千度、呼たてられてしぶくに、こなたの船にうつり來ぬ、琵琶
 を抱きてまばゆけに面を掩ひ彈そめし、その撥音にいひしらぬ、深き情
 のこもりつゝ、ひき行くまゝにつねぐの、己が心の憂れたさを、訴へ
 出る心地せり、人こそ知らぬ濱ゆふの、百重かさなる憂おもひ、積る怨
 の數々を、四筋の糸にいはずらむ、軽く打ち緩くひねり、はらひつか
 げつ初めには、霓裳をかなで後には六公を彈じけり、大弦は嘈々として
 村雨の如く、小弦は切々として私語ごとに似たり、切々と嘈々ときき
 ませて彈ば、大珠小珠玉盤に落つ、間關たる鶯の聲、花陰に滑かに幽
 咽たる泉流水早瀬を下る水泉冷澁の趣凝りて、絲を絶え、しばし聲な

れ戯れ合ひ、さいめき交し綾錦、かつぎ販れば家も富み、身も築えつ
 世の中は、かくあるものと愚にも、思ひ頼みて花の春、紅葉の秋と
 等閑に、日を経る程に同胞に、親族に離れ夕去さ、朝來りてかは花の、
 盛もいづこ杉の門、馬も車も寄來ねば、世渡る活計つさはて、身を浮草
 の根をば絶え、風のまに、誘れて、情も淺き商人を、夫とするだに
 果敢なさを、其夫遠く旅立し此浦船に夜を守る、月明に水寒み、更ゆく
 まゝにまどろめば、吾身の盛り夢に見て、いと悲しさ増りぬと、語
 るを聞きて思はずも太き溜息つくくと、琵琶をきくだに悲しさを、
 此物語のあはれさよ、始めて逢る此人と、身の際こそはかはれども、

我も同じく浮沈み、去年より茲にさすらはれ、潯陽城の片はとり、あ
 しと竹との生じける、いぶせき中に家居して、旦夕べに聞ものは、高
 嶺の猿杜鵑、樵夫の歌や總卷か、吹なす笛の聲ばかり、返りて胸を痛め
 つゝ、病ひ彌ます心地して、むかし聞つる糸竹の、音なつかしく思ひし
 に、今宵の君が琵琶のこゑ、天津乙女の音楽を、さく心地していと嬉し、
 辭む事なく今ひとつ、彈て聞せよ予もまた、歌をつくりて贈らんと、
 いへば實にもと思ひけむ、又も彈ずる撥音は、前の聲よりいそがしく、
 物凄ければ江州の、司馬はさらなり並居たる、人も袖をぞしぼりける。

* * * * *

螢 雪

夕の電朝の露。寔や人の一生は。彌生の春の櫻花。「其花よりも尙脆し。
 『然れば昔しの人々が。浮游に比して人命の。測り難さを歎ぜしも。ま
 た無理ならぬ事ぞかし。今は幼き家の子も。何日か頭に霜を置き。腰
 は梓の弓となり。老の坂路に杖を曳く。身ともなりなば何事か。成し
 遂る事のあるべきや。日頃の懈を思ひだし。いかに後悔なせばとて。
 駟馬も逐ふ事叶ふまじ。昔朱文公も此事を。歎きの餘り口吟む。其詩
 を茲にしらべなば。

勿レ謂今日不レ學而有ニ來日。

勿レ謂今年不レ學有ニ來年。

日月逝矣歳不ニ我延。

嗚呼老矣是誰之愆。

然れば人々心せよ。時計の針の絶間なく。勤め勵みて怠らず、甚じき
 功績なしてこそ、人と生れし甲斐はあれ、學びの楫を失はず、心をそ
 げ諸共に、勤め勵みて撓むなよ、精神一到何事か、「成らざることの
 あるべきや、千辛万苦も嘗めつくし、かんばしき名を遺すこそ、皇御
 國の民ぞかし、學べや學べ家の子よ、顧みもせて學ぶべし、顧みもせ
 で學ぶべし。

*
 *
 *
 *
 *
 *
 *
 *

群からず

まだ住み馴れぬ此里の、人の心が群鳥、逢ふも逢はぬも浮きも辛きも
 告や渡せば無き事故に「余所に名の立つ因果なり、よし其れ迎も君様
 に、逢へて立つ名は是非もなし、逢はで浮名の立つは無事無益、只世
 の中に昨日見ても今日見ても、音信聞いても見も厭かぬ者は、春の始
 に梅と櫻に鶯の聲、夏は卯の花に「山時鳥空に一聲音信て、暮れ行く
 秋の蟋蟀す、木の間の月に鹿の遠聲、なんと聞いても面白や、冬は板
 屋に霰降る音、雁の聲、四方の梢に積もる白雪、尙夫れよりも見ても

見も厭かぬものは、二人の親の面影と、自らすかたを寫す唐の鏡に戀
 しき人の面影は、日に幾度見ても見もあかぬ、其れに付さても皆人は、
 戀をしてこそつれなきを知れ、我身をつめて人の浮身は知られたり、
 戀ひしやと我れは偏に思へども、思はぬ君を思ふこそ、磯の鮑の片思
 ひ、我に心を置く君も、聞けば餘所には打解けて、我には謙疎そな振
 を召す、嗚呼恨めしや「篠田の森の葛の葉の、恨みに置ける露程も、
 思ひはせて思はぬ君を思ふこそ、是も因果の縁で候。

* * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *

送 別

五年六年もろともにも、同じ學びの窓の内、互ひに勵みはげまされ、「光
 りのどけき春の日や、月かけ清き秋の夜や、五月雨晴れぬ夏の日も、
 雪ふりしきる冬の夜も、いと楽しく過しけり、月日の流れ早くして、
 それも昨日の夢のあと。明日は旅路に出船の。友なり師なる我が君の。
 此に船出を祝はんと。祝の酒をすゝむなり。歌へや舞へや諸共に。今
 日を限りて明日よりは、又逢ふ事のあるべきや。同じ團居の友人よ。
 いざやくめく此酒を。歌へや舞へや皆共に。明日の別れのつらけれ

ば。「語り明さん今日一夜。取れや人々酌む酒の。つさせぬ思ひあらし
 その。深き契りを忘るゝな。

薩 摩 瀧

平 野 國 臣

花の都も秋はなほ、ゆふべ淋しき風情なり、名は流れたる清水や、落
 来る瀧のおと羽山、秋の葉色の溝毎に、ちるや紅葉のちりくと、亂
 れゆく世の浪花江や、芦のさはりは繁くとも、猶世のために身を盡し、
 つくさむ迎もつくし瀧、波影の岸のなみならぬ、操をいつか深緑、色

はかはらぬ青柳の、驛路をこえて香椎瀨、多田の橋をば打わたり、千代の松原千代かけて、万世かけて君が世の、千歳の松によそへつゝ、神に歩みを箱崎の、社にかけし四つの文字、筆の主をよく問へば、延喜の帝かしくも、御手をば下しませりつゝ、爰も昔は石だたみ、重ねくし白浪の、よせし昔を忘れじと、恨み浦回の片たすき、かけて歎くも憐れなり、濡衣塚のぬれ衣、わが身にさたる心地せり、やがて博多の假住居、こゝも波風さはがしく、又ゆく方は薩摩がた、沖の小島にあらぬども、心細くも都にて、誰かあはれと思ふらむ、たよるは心つくし瀨、一人の外に打明けて、語らふ人もうき枕、野間の關屋のせ

き守に、せきとめられて又舟に、のるも夫とはより難き、波にゆられて行く先は、黒の瀬戸てふ名もうしや、頓て鹿兒島かこの鳥、翼縮めて潜みしが、また木枯にかどろきて、日向をさして船出せし、日は神無月望の夜の、傾く月と諸共に、照り輝やきて曇りなき、身は大君の御爲とて、茲に一人の薩摩人、いかなる縁前の世に、契りも深き船の沖、底の藻屑となりぬるを、乗合人も船人も、權の雫も露程も、さりとは知らぬ白浪の、立さはげ共甲斐ぞなき、なほ東雲の明け鴉、なくより外はなかりけり。

* * * * *

七 卿 落

世は苜菰と亂れつゝ、茜さす日もいと暗く、蟬の小河に霧立ちて、「隔
 ての雲となりけり、」あら痛ましや玉尅る、うらに明暮宿直せし、實
 美朝臣に季知卿、壬生澤四條東久世、其外錦小路殿、今は浮草の定め
 なき、旅にしあれば駒さへも、進み兼ねてはいばえつゝ、降りしく雨
 の絶間なく、涙に袖の濡れ果て、「これより海山淺茅原、露霜分けて
 芦がちる、難波の浦にやく鹽の、からき浮世は物かはと、行かんとす
 れば東山、峰の秋風身に染みて、朝な夕なに聞さなれし、妙法院の鐘

の音も、「さえて今宵は憐れなり、いつしか暗き雲霧を、拂ひ盡して百
 敷の、都の月をい愛で見給ふらん。

* * * * *

桶 挾 間 合 戦

時は永祿三年五月の頃かとよ、今川治部少輔義元は、尾州清洲の城主、
 織田上總介信長が、中島の砦に二萬餘騎にて押寄せ、攻惱まさんと懸
 りしが、其勢ひ宛然潮の沸く如く、中島の西の砦には、梶川五右衛門
 佐久間左京、又東の砦には、水野帶刀、是に一千三百餘騎相加はり、

寄手の内なる宮永伯耆守、朝比奈小三郎は、今朝よりの戦ひに、少しも疲れたる氣色なく、火水になつて戦ひしが、是より諸方の砦へ、今川方の大軍が、三千又は五千騎、手分をなして、砦々に戦ひを挑みしが、打出す鐵砲の煙りは、混沌として照る日の光も失ふ計りにて、関の聲は山も崩れて、海も沸くかと怪しまる、其内に大將義元は、飽まで驕り増長し、諸方の軍の勝利を聞きしより、酒くみかはし酩酊し、人も無氣なる有様に、頻りに誇りて居たりしに、其間に諸方の合戦さかりにて、勝敗も未だ見えざるに、又討死するもあり、生捕になるもあり、去れば義元の旗本は一千餘人と聞えしが、軍律いたく打亂れ、

盃盤狼藉の體にして、如何なる英雄豪傑も、酒を過して亂れけり、況てや大將たる義元が、驕り長じて鎧をも脱ぎ捨てたりと傳ふれど、流石は名將なれば、個やうの事はなかりけん、去れど酒にふけりし其爲に、心亂れてありけるが、其内に時なる哉、天の與ふる處とや、風の模様のかはり來て、熱田の宮の方よりも、黒雲俄に群りて、見るがうちにも大空は、墨を流すが如くにて、吹來る風にうち連れて、大雨頻りに降そゝぎ、さながら篠をつく如し、されば砂塵は飛んで面を撲ち、大木折れて路を遮る計にて、山々の樹木の鳴音は、囂々として物凄し、打ちよる浪は雪の山の崩るゝ如くにて、其狀譬ふる物こそなかりけれ、

其内に激雷鳴出で、稻妻は閃き渡り、眼中に燒鐵を差すかと思ふばかりなり、今は又白日眞盛りの時なるに、人の顔さへ見え分かぬ、暗夜に均しき有様なり、されば大將義元の本陣にても、大風雨の其爲に、幕張其他を吹き散し、在所をさへも失へば、中々酒宴もなし兼ねて、しばし木陰に身を寄せて有けるが、折しも大將の側に一人も附添ふ者なかりしが、其時濡れたる幕を打絞りはたと一人の勇士現はれて、槍うち捻り、大音揚げ、大將義元殿へ見参し、御首頂戴仕らん、斯く申す某は、尾張國清洲の城主織田上總介信長の御内、服部小平太と申す者なり、いざ御首頂戴仕らんと、名乗るや槍を取つて、義元の胴腹目

掛けてあつと一聲突掛くる、大將義元是を見て、下郎はいといふ内に、彼の小平太の槍は電光石火と閃きて、義元の左の股へ突貫きたり、義元下郎といふまゝに、郷の義弘の一刀を抜き討に、腦上より切り下し、小平太が持ちたる槍の千段巻の邊より、はつしと切り、餘る尖にて、小平太の膝頭へ切付けたり、其勢ひに服部は、後ろの方へ飛ひさがり、撞と倒れて絶入りたり。

同

(二段)

さる程に又も一人の勇士あり、幕を絞りて飛ひ來り、織田信長の御内

なる毛利新助と名乗つゝ、組伏せんとや思ひけん、後へ廻りて大將の、
 義元にむすと引き組み、無双の猛將といはれし義元も、最前の深手の
 爲めに惱みしが、後より大の男に組附れ、振り放たんと身をもたゆれ
 ど、新助は終に義元を引き倒し、鎧通しを抜かんとせしに、義元むね
 んと曰ひながら、新助の手頸を押へしが、我を忘れて夢中となり、新
 助の左手の小指を食ひ切りたりしが、終に鎧通しを引き抜きて、義元
 の首を忽ち掻切りたり、やゝありて服部小平太は、漸くに起上り、如
 何に新助其の功名は此の小平太ぞよ、最前の深手は我が槍にて候へば、
 義元を討取りたるは、小平太なりといひければ、血に染たる己れの左

手をかへりみず、汝卑怯みれんの事を申すな、今まで氣を絶え大事を
 忘れけん、兎にも角にも目前に、大將の首を揚げたるは毛利新助、何
 よりの證據は、左手の小指にて候へと、二人が功名手柄を争ひてあり
 し處に、義元の旗本、幕の外にありて、御大將の傍ら物騒かしかりし
 に、何として是れは、又大木の折れたるかと、上を下へと立騒ぐ、其内に
 又も馳せ來るは、木下藤吉郎にてありけるが、此時に新助は藤吉郎のか
 たを見て、是れ木下氏、我は只今此處にて、敵の總大將今川義元を討
 取りたり、足下は少しも早く此趣きを、信長公に言上し給へ、我も速や
 かに御本陣まで推參仕らんと思ひしが、如何にも身體半身血に染みて

候へば、た易く立べき事も出来されば、藤吉郎是をたすけ參らせ、日頃武勇の其許、尙も氣を落し給ふなどはげまして、尙又義元の拔放ちたる一刀が、大地に落たりしが、漸々に新助是を拾ひ取り、泥にまみれし大將の首と一同に、木下の跡に附てぞ來りける、去れば、又雨は愈々降りしきり、白晝とは申せとも、暗夜の如くにて物の黑白も分ちえず、其時織田方は早くも其所を引上げて、跡の混亂物に譬へんかたもなし、時は永祿の三年五月十九日ひるすぐる頃はひ、流石街道一の剛將といはれたる義元も、行年四十三歳を一期として、思ひ寄りさる桶狹間、田が窪の露と消えたるは、戦國の慣ひとは申せども、實に情

なき事かな。

同

(三段)

去程に木下を力に頼み、漸く來りし毛利新助は、大將織田信長公の御前へ罷り出で、今川義元の首を實檢に供へ、尙分捕に及びたる、此の太刀こそは隠れもあらざる大將の差添にておはすると、差出したれば、信長是を取敢ず、義元の太刀を一覽せられ、是は疑ひもなき、松倉卿の太刀、又是は義元の首にて、如何に毛利新助、汝今日の手柄、日本無双の功名と、流石名立たる所の街道の、剛將今川義元を討取りしは、

此上もなき功名なり、此の信長、千變萬化いたしたる、是までの艱難
 辛苦は、此の首を見んが爲め、されば汝今日の手柄は、數萬の黄金に
 も替え難き、類ひ稀なる得物にて、恩賞は追て沙汰に及ぶべし、左様
 に心得よと、去れば新助は、大將の御褒の御言葉を頂戴し、嬉し涙に
 暮れにけり、さもあれば、木下藤吉郎直に清水を汲みあげて、御手許
 へ首級を捧げゝる、信長義元の首を暫らく打眺め、鬼を欺く猛將も、
 はらくと落る涙を鎧の袖にといめ兼ね、思はず知らず我を忘れて、
 御聲を放ち、嗚呼扱も名高き剛將と、曰れし人も斯くなり玉ふは、誠
 に悴ましき事なりと、我も御身の首級を見んと、是まで辛苦を致せし

甲斐ありて、今は望みの通り首を此に實見す、去ながら最早信長も張
 合抜けたりけり、斯の如き猛將と、戦ふこそ闘みなれ、斯く果敢なく
 首を得られては、最早我望も失ひし、亂國の慣ひとは云ひながら、扱
 て悼ましき事の限りよと、信長暫しがほどは歎息し、御側の人々、何
 れも鎧の袖をぞ濡らじける。

* * * * *

本能寺

麻と亂る、戰國の、人と言へば誰もかも、馬を養ひ兵を練り、糧を

收て劔を磨す、頃は天正十年夏五月、徳川封せられ、安土城下に入し
 かば、織田右大將信長は、いと鄭重に迎へんと、直ちに惟任光秀に、饗
 應の役をぞ命せらる、御請致せし光秀は、亂れたる世に心得し、都の
 手振見せばやと、さしも目出度く勤めしを、小人輩の言により、善
 美過分の評をうけ、疑心暗鬼は信長の、胸に宿りし時も時、羽柴秀吉
 中國より、援けの兵を請ひしかば、嚴命忽ち光秀の、首の上にぞか、
 りける、光秀私かに思ふ様、人もあらんに此我れに、羽柴が命に従へ
 とは、あな情けなの我君やと、齒嚙をなして恨みしは、君に仕ふる人
 臣の、よもあるまじき事なれど、又信長を見るときは、右大將とも仰

がる、身に、疎暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして、光秀の首べに
 鐵扇を加へさせ、またある時は好まぬ酒をこと更に、我意を透してす
 ゝめしめ、志賀のみやこの領地さへ、三年のうちには事もなく、奪ひ
 取られむ説を聞き、今又産を傾けて、あらたに來りし家康に、心盡し
 のもてなしも、琵琶湖の水の泡と消え、抑へし熾むらくと、もゆる
 思ひの光秀が、拳を握りて立上り、動く眼の間より、由々敷大事のは
 の見えしを、露ほど知らぬ信長は、諸將を安土に止め置き、親から近
 臣百餘人、ひき従へて京都なる、本能寺にぞ入にける、時こそ來れと
 光秀は、田鶴もあそはぬ龜山に、從子光春等を召しよせて、積るうら

みの數々を、數ふるうちに光秀が、眼は血汐はとばしり、逆立髪は冠を、突く勢を見てとりし、光春どもが百千たび、諫むる言葉も聞かばこそ、推て謀反に加盟させ、暴戻無道の弑逆をば、企てしこそあさましけれ、かくて士卒を打揃へ、中國勢を援はんと、偽り向ふ大江山、心の駒も烏羽玉の、暗路をいそぐばかりにて、さしも忠義の光秀が、追追ひ年も老の坂、如何なる道や迷ひけむ、無念至極の胸の内、亂れて濁る桂川、渡らん駒の足なみは、東し指てぞ進みける。

本能寺溝深幾尺 我就大事在今夕

黄粽在レ手併レ黄喰 四簷梅雨天如墨

老坂西去備中道 揚鞍東指天尙早

我敵正在本能寺 敵在備中汝能備

爰に始めて軍勢は、漸くふた心とさとりしが、捨る命は一つぞと、時しも六月二日の朝まだき、露の身輕き軍兵が、本能寺を取圍み、関を作りてぞ攻め入りける、此物音に信長は、寐覺の耳をそばたつれば、紛ふかたなき人馬の聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴て立ちあがり、疾く見届よとわりければ、森蘭丸畏り表の方に走り出、見越の松に片手をかけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞か白旗に、染たる桔梗の紋所、見るより蘭丸引かへし、光秀謀反と答ふるに、嚇と怒りて信長は、